市 内 遺 跡 1

―八幡平遺跡・向山遺跡・小峰遺跡・安中17号墳―

２０１２

群馬県安中市教育委員会

市内遺跡 1

―八幡平遺跡・向山遺跡・小峰遺跡・安中17号墳―

２０１２

群馬県安中市教育委員会

例　　言

1　本書は安中市が実施した市道建設工事に伴う八幡平遺跡における発掘調査（平成３年度）の成果と宅地開発に伴う遺跡範囲確認調査及び工事立会調査（平成22・23年度）の成果をまとめたものである。なお、付編として小規模開発に伴う遺跡範囲確認調査を実施した向山遺跡（遺跡略称：Ｆ－６）、小峰遺跡（遺跡略称：Ｄ－25）、個人住宅工事に伴う発掘調査を実施した安中17号墳（遺跡略称：Ｄ－27）の調査概要を併せて報告する。

2　遺跡名：八幡平遺跡（遺跡略称Ｃ－７・Ｃ－24）

3　遺跡の所在地：安中市簗瀬字八幡平地内

4　確認調査経費の一部については、「市内遺跡発掘調査事業」として国庫補助金及び県費補助金の交付を受け実施した。八幡平遺跡の発掘調査（１次）、報告書作成は、市費で実施した。

5　確認調査及び発掘調査・報告書作成は、安中市教育委員会が主体となって直営で実施した。

発掘調査担当者　平成３年度１次調査（Ｃ－７）　千田茂雄（当時社会教育課文化財係主事）
平成22・23年度２・３次調査（Ｃ－24）　井上慎也（学習の森文化財係主査）・菅原龍彦（同主事）

資料整理担当　平成23年度　井上・菅原

6　本書の編集は井上が行い、執筆は井上（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－１・Ⅳ－２、付編１・２）・菅原（Ⅲ－２・３、Ⅳ－１、付編３）が行った。

7　遺構の写真撮影は各担当者が行った。遺物の写真撮影は、壁　伸明（同行政嘱託）が行った。

8　発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

9　確認及び発掘調査、遺物整理の期間中、多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

凡　　例

1　遺構の実測図は１/80を基本としたが、遺構の大きさにより1/100、1/120、１/160、1/400とした。

2　遺構図中の北マークは磁北である。
本文中で使用した地図は国土地理院発行の２万５千分の１地形図「富岡」、安中市都市計画図（1/2500）である。

3　遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。
埴輪・土器類・瓦：１／４　形象埴輪：１／８　鉄製品：１／３　玉：１／２

4　土層説明中での記号、略称は次のとおりである。
土層名称及び量の基準：「新版標土色帖」による。
色調＜：より明るい方向を示す（暗＜明）
しまり、粘性　◎：あり　○：ややあり　△：あまりない　×：なし
混入物の量　◎：大量（30～50％）　○：多量（15～25％）　△：少量（５～10％）
※：若干（１～３％）
混入物　ＲＰ：ローム粒子（溶け込んだ状態）　ＲＢ：ロームブロック（固まりの状態）　ＹＰ：板鼻黄色軽石

5　基本層位（共通）Ⅰａ層：黒褐色土層（浅間Ａあるいは Ｂ軽石含む）、Ⅰｂ層：灰白色軽石層（浅間Ａ軽石純層）、Ⅱａ層：黒色土層（浅間Ｂ軽石含む）、Ⅱｂ層：灰褐色軽石層（浅間Ｂ軽石純層）、Ⅲ層：黒色土層（弥生～古代）、Ⅳ層：暗褐色土層（縄文）、Ⅴ層：暗黄褐色土層（ローム層）、Ⅵ層：黄褐色軽石層（As-YP層）

目　次

例言・凡例・目次

Ⅰ　調査に至る経緯と経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2
Ⅲ　遺構と遺物 …… 5
　1　調査の概要 …… 5
　2　遺構 …… 14
　3　遺物 …… 14
Ⅳ　成果と問題点 …… 15
　1　K－3号古墳について …… 15
　2　八幡平陣城について …… 15

付編1　向山遺跡の確認調査 …… 16
付編2　小峰遺跡の確認調査 …… 18
付編3　安中17号墳の発掘調査 …… 20

写真図版
抄録

挿図・表目次

第1図　調査遺跡の位置と周辺遺跡分布 …… 3
第2図　八幡平遺跡のトレンチ・遺構配置図 …… 4
第3図　八幡平遺跡　市道部分遺構実測図 …… 7
第4図　八幡平遺跡　3・5トレンチ遺構実測図 …… 8
第5図　八幡平遺跡　7・8トレンチ遺構実測図 …… 9
第6図　八幡平遺跡　11・12トレンチ遺構実測図 …… 10
第7図　八幡平遺跡　K－3号古墳全体図 …… 11
第8図　八幡平遺跡　K－3号古墳遺物実測図(1) …… 12
第9図　八幡平遺跡　K－3号古墳遺物実測図(2) …… 13
第10図　八幡平遺跡と関連遺跡 …… 15
第11図　向山遺跡　遺構実測図 …… 17
第12図　小峰遺跡　遺構・遺物実測図 …… 19
第13図　安中17号墳　全体図 …… 22
第14図　安中17号墳　石室実測図・遺物実測図 …… 23
第1表　八幡平遺跡　遺物観察表 …… 13

Ⅰ　調査に至る経緯と経過

平成３年度

平成２年10月、安中市産業部商工観光課及び土地改良課（当時）より、市史跡八幡平首塚の駐車場及び道路建設工事にかかる埋蔵文化財の照会があった。開発予定地には、周知の遺跡である八幡平首塚と簗瀬二子塚古墳が存在していたため、これらの遺構に当たる可能性があると回答した。その後、計画変更を含め、再三協議を行ったが、首塚への進入路の確保と見学者のための駐車場の必要性から、発掘調査を実施し、記録保存を講ずることになった。発掘調査は、平成３年９月10日から10月９日までの間、実施した。

平成21年度

携帯電話基地局建設工事に伴う確認調査：平成20年９月、株式会社ＮＴＴドコモ群馬支社より、工事予定地内における埋蔵文化財の照会があった。該当場所は、中世の八幡平陣城内であることから、開発者側と工事区域内における埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、平成21年３月、確認調査を実施することになった。平成21年３月、必要書類（法93条届出）が提出された。平成21年４月９日、トレンチによる確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。慎重工事の措置となった。

平成22年度

分譲住宅造成（１期）に伴う確認調査及び工事立会：平成22年３月25日、株式会社高橋ハウジング（以下開発者）から地域開発事業計画書が安中市地域開発対策委員会へ提出され、土地分譲造成事業予定地の埋蔵文化財の状況についての照会があった。該当場所は周知の埋蔵文化財包蔵地内で簗瀬二子塚古墳の隣接地であることから、開発については当教育委員会と協議が必要であることを意見書を通じて回答した。その後も開発計画自体の変更及び見直しについて、開発者側と協議を続けたが、既に土地を取得し、開発計画の許可も下りていることから、見直しは困難であることから、事前に分譲予定地内の埋蔵文化財の有無と性格を把握するための確認調査を実施することで、開発者側と合意した。平成22年４月21日、開発者側から確認調査の依頼、必要書類（法93条届出）が市教育委員会へ提出された。平成22年４月23日、市教育委員会は、群馬県教育委員会と開発計画に対する今後の対応について協議し、計画に先立ち、５月に遺跡の範囲確認調査を実施することになった。平成22年５月10日～14日、確認調査を実施する。工事予定地内で簗瀬二子塚古墳の西側で古墳の周溝、八幡平陣城に関係する遺構が発見され、確認調査の結果を開発者側へ伝えた。平成22年５月17日、開発者側と埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行い、その内容について覚書を交わした。工事計画地の変更は困難であったが、開発地全域に盛土を行う造成であることから、確認された遺構までの保護層が保てる見通しとなったため、基本的には、現状保存の措置を講ずることになった。ただし、今後、工事によって遺構への影響を被る可能性がある部分（道路他）については、市教育委員会が立ち会うことで対応することになった。なお、住宅分譲地部分については、その都度、工事に先立ち発掘届を提出することになった。平成22年10月14・15日、工事によって掘削する南側道路の側溝部分の工事立会を実施した。南側道路の北半分はすでに市史学術調査でトレンチ調査を実施してたため、対象から除外した。立ち会いの結果、７トレンチで確認された古墳の続き（周溝と葺石）が発見され、工事によって保護層及び現状保存が、計れない部分についての発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じた。他の工事予定地については、盛土等による現状保存が計られ

たため、工事の状況のみを確認した。

個人住宅に伴う工事立会：２月２日、５月に確認された古墳の周溝外側にあたる部分について工事立会を実施した。一部範囲で縄文時代遺物包含層まで掘り下げたが、遺構、遺物は確認できなかった。

平成23年度

個人宅造に伴う確認調査：首塚古墳北側で６月３日に実施した。調査は、南北方向のトレンチを２カ所設定し、周溝の確認を行ったが、遺構、遺物は確認できなかった。遺物包含層までの深さが厚く、工事による影響が少ないため、慎重工事の措置とした。なお、計画地内には、市史５Ｂトレンチ（遺構・遺物なし）がある。

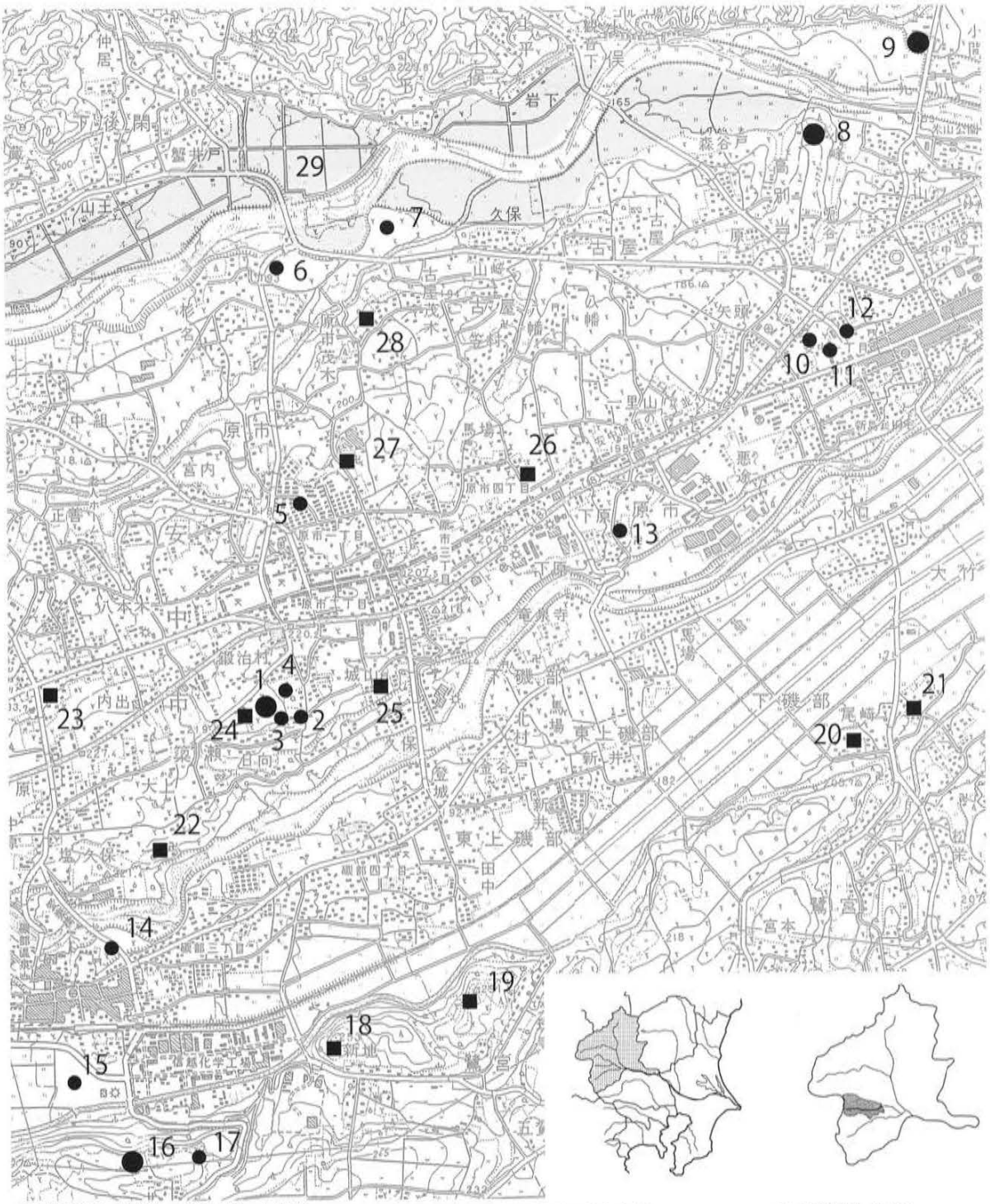
分譲住宅造成（２期）に伴う確認調査及び工事立会：平成23年10月、株式会社高橋ハウジングより、分譲住宅造成に伴う埋蔵文化財の照会があった。当地は、平成22年５月に確認調査を実施した場所に隣接していることから、開発計画に先立ち埋蔵文化財の取り扱いについて協議をする必要があることを伝えた。10月11日、事前に必要書類（法93条届出）、確認調査依頼書が提出された。10月24日付けで開発者側から安中市地域開発委員会へ計画協議書が提出された。このことについて、意見書を通じて埋蔵文化財の確認調査を実施するための事前調整を行うことで回答した。12月19・20日に市教委が確認調査を実施した。確認調査は、道路部分を対象とし、２カ所のトレンチを設定した。調査の結果、１トレンチでは、当初から予想された中世の溝が確認された。首塚古墳北側周溝部分を対象としたトレンチ調査では、周溝の痕跡を確認し、市史の調査と同様、周溝の範囲が確認できないほど浅いことが判明した。宅地部分は、掘削による影響は小さく、全体的に保護層が保てるまで盛土を行うため、現状保存の措置を講じた。道路部分については、遺構の性格を把握するための必要な記録を作成した。道路の構造上、遺構への影響は小さく、対象範囲が狭小であることから、首塚古墳への影響が懸念される部分については、工事立会を平成24年１月30日に実施した（周溝のみ確認し、現状保存の措置とした）。

資料整理・報告書作成：資料整理は、確認調査終了後、断続的に実施し、平成23年度に遺構図修正・作成、遺物水洗・注記・選別・実測・トレース・観察表作成、写真整理、報告書図版作成等を行った。報告書編集には、効率化を図るためパソコンを使用した。

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境

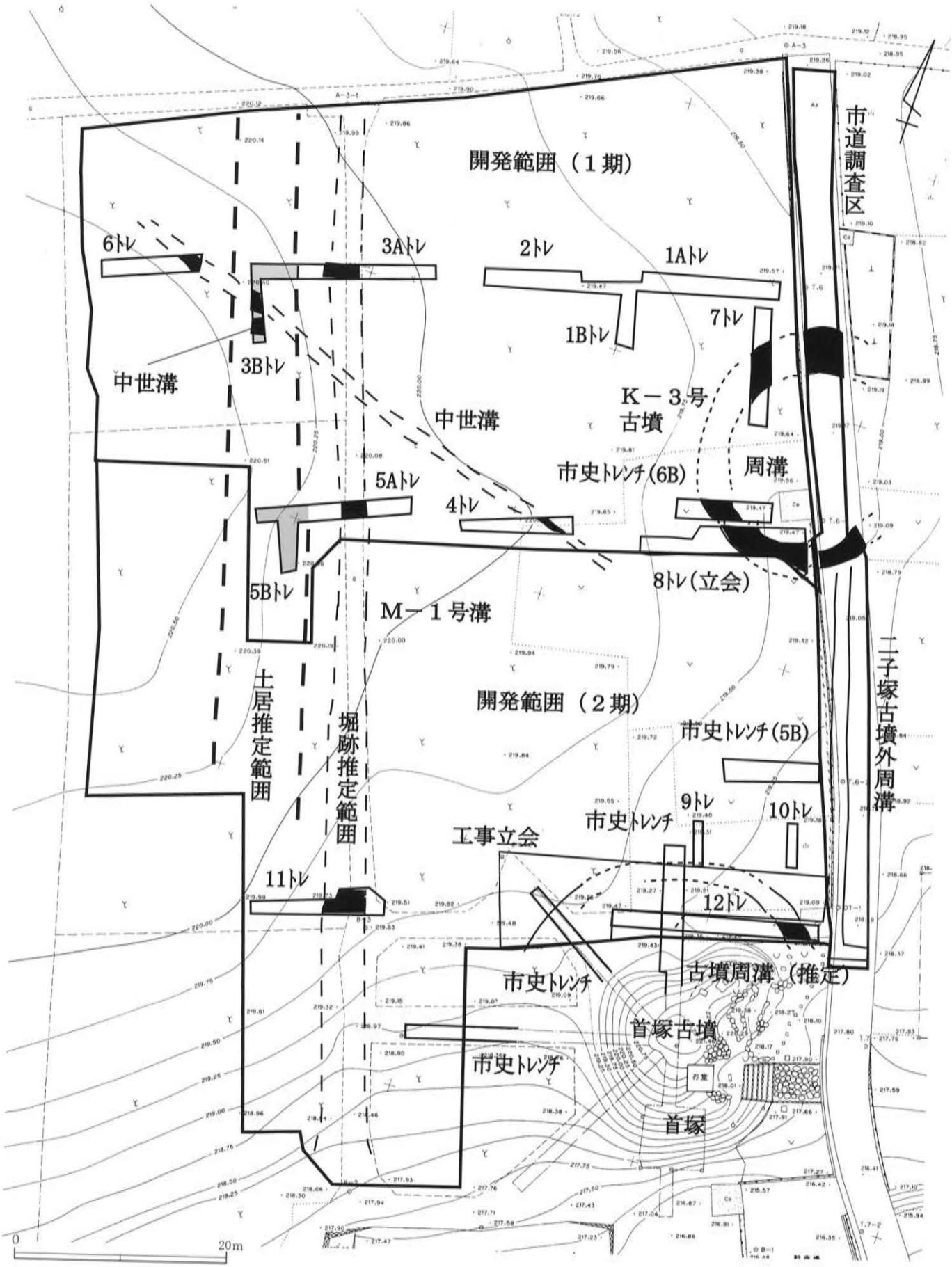
八幡平遺跡は、安中市簗瀬字八幡平地内に所在する。本遺跡は、碓氷川と九十九川に挟まれた中位段丘（原市・安中台地）に立地し、南側は、碓氷川の河岸段丘に面している。標高は、219～220mである。

本遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地市№330（縄文・古墳・平安）、簗瀬二子塚古墳（市№1092）、八幡平陣城（市№1517）として遺跡台帳に登録されている。本遺跡周辺では、縄文時代後期の炉跡を検出した「簗瀬炉跡」、横穴式石室をもつ６世紀初頭の前方後円墳である簗瀬二子塚古墳（原市13号墳）、６世紀後半の首塚古墳（原市12号墳）、中世の八幡平首塚、八幡平陣城が存在する。簗瀬二子塚古墳及び首塚古墳は、市史編纂事業に伴う学術調査を平成７～９年度に実施し、平成12年度には、市道建設に伴う周溝部分を対象とする発掘調査を実施した。また、平成11年度には、市道用地を対象とした確認調査を実施した。この調査結果をもとに平成15年度に簗瀬炉跡に隣接する八幡平Ⅱ遺跡の発掘調査を実施し、縄文時代中後期の配石遺構を確認した。



1 八幡平遺跡（本報告：後期古墳、中世溝）
2 八幡平Ⅱ遺跡（縄文中後期集落）
3 首塚古墳（後期古墳）・首塚（中世）
4 簗瀬二子塚古墳（後期古墳）
5 清水Ⅰ～Ⅵ遺跡（縄文・古代集落・中世土器生産）
6 杉名薬師遺跡（弥生後期・古墳後期集落）
7 高橋遺跡（弥生後期・古墳後期集落、後期古墳）
8 小峯遺跡（本報告：古代遺構、中世溝）
9 安中 17 号墳（本報告：後期古墳）
10 土井遺跡（古墳中期・古代集落）
11 並木遺跡（古代集落・焼印出土）
12 上野尻遺跡（推定東山道駅路、中世溝）
13 悪途東遺跡（終末期古墳）
14 塩ノ久保遺跡（中期古墳）
15 田中田・久保田遺跡（古墳前期遺構）
16 向山遺跡（本報告：古代区画溝）
17 長谷津遺跡（弥生中後期・古墳集落）
18 磯部城（中世）
19 文殊寺の砦（中世）
20 尾崎屋敷（中世）
21 座光寺館（中世）
22 滝山城（中世）
23 郷原西城（中世）
24 八幡平陣城（中世）
25 原市城（中世）
26 原市東館（中世）
27 榎下城（中世）
28 茂木東館（中世）
29 九十九川流域（古代水田）

第１図　調査遺跡の位置と周辺遺跡分布（国土地理院1/25000「松井田」・「富岡」）



第2図　八幡平遺跡のトレンチ・遺構配置図

Ⅲ　遺構と遺物

1　調査の概要

平成３年度調査

該当地は、簗瀬二子塚古墳の西側部分に相当する。発掘調査では、南西隅及び東西方向に延びる外周溝を確認した。また、調査区北側では、外周溝とほぼ直交して重複する浅い溝状遺構を確認し、簗瀬二子塚古墳に関係する付帯施設の可能性（安中市史2001）が考えられたが、平成22年度の確認調査で、別の古墳の周溝であったことが判明した。遺物は、埴輪片が多数出土した。

平成22年度調査

該当地は、八幡平陣城及び簗瀬二子塚古墳西側に相当する。宅地造成地点（１～７トレンチ）、工事立会地点（８トレンチ）、個人住宅地点（９・10トレンチ）である。トレンチによる確認調査の結果、古墳（Ｋ－３号古墳）、八幡平陣城の堀（溝）と推定される遺構（Ｍ－１号溝）、中世溝２条を確認した。

１Ａトレンチ：市道に隣接する部分である。調査では、Ⅲ層及びその下層（Ⅳ層）からは、遺構は検出されなかった。Ⅲ層までの深さは、地表下30～40㎝である。縄文土器片（加曽利Ｅ３式期）６点出土。

１Ｂトレンチ：市史調査で確認された中世溝の延長線上であったが、遺構は検出されなかった。Ⅲ層までの深さは、地表下30センチである。

２トレンチ：市史調査で確認された中世溝の延長線上と予想される部分であったが、遺構は検出されなかった。さらに下層（Ⅳ層）においても遺構は、検出されなかった。Ⅲ層までの深さは、地表下30～40㎝であり、耕作等による撹乱が著しい。

３Ａトレンチ：現況図では、区画された部分である。調査では、この部分に堀跡が検出された。さらに西側では、地表下20㎝のところでⅡａ層上でロームを含む盛り土が確認された。しかし、耕作等による撹乱が著しく遺存状況は極めて悪く、部分的に残る。検出した堀跡は、浅間Ａ軽石を含む耕作土及び撹乱層で覆われており、覆土中位に浅間Ａ軽石の純層が堆積する。堀の確認面は、地表下30～40㎝のところで、底面までは230㎝に達する。

堀跡の形態は、断面Ｖ字状の「薬研堀」に分類される。西側部分は、浅間Ｂ軽石混入土上部の盛り土からの掘り込みを確認でき、土層堆積状況から中世の所産である。時期の下限を調査するため、断面を掘り下げたが、Ⅲ層においても削平及び撹乱が及んでいたため、現時点では、掘削年代の下限は不明である。縄文土器片（加曽利Ｅ３式期）１点、中世陶器１点出土。

３Ｂトレンチ：堀跡内側に相当する土塁跡と考えられる盛り土跡を確認した。上部は削平もしくは撹乱によって状況は不明であったが、痕跡が広範囲にあるものと予想される。

また、地表下30～40㎝で覆土が浅間Ｂ軽石の混入土である溝を確認した。また、この溝と重複するローム混じりの盛り土で覆われた溝を検出した。

４トレンチ：トレンチ東角で地表下30～40㎝で覆土が浅間Ｂ軽石の混入土である溝を確認した。耕作及び撹乱が著しく、Ⅲ層の一部まで及んでおり、他には遺構は検出されなかった。縄文土器片（関山式期１点・加曽利Ｅ３式期５点）、埴輪片１点出土。

５Ａトレンチ：３Ａトレンチで確認した堀跡及び土塁跡の続きを確認した。土層及び形状から同一であることが判明した。

５Ｂトレンチ：堀跡内側の土塁跡を確認したが、耕作及び撹乱が著しく遺存状態は３Ｂトレンチと同様悪い。地表下20㎝で確認した。埴輪片１点出土。

６トレンチ：分譲地であるため、直接工事の影響を受ける場所ではないが、３Ａ及び５Ａトレンチで確認した遺構とは別に、堀跡が存在するかについて調査を実施した。トレンチ東角では、覆土が浅間Ｂ軽石の混入土である溝を確認した。このトレンチでは、Ⅱａ層が確認できたが、城館跡に関係する遺構及び盛り土の痕跡は確認できなかった。埴輪片１点、結晶片岩礫１点出土。

なお、３Ｂ、４、６トレンチで確認した中世の溝は、遺構の走向から判断して同一遺構と推定される。また、市史調査で確認された溝と走向が一致することから、これらとの関連性が考えられる。

７トレンチ：市道に隣接する部分で、市道調査において検出された遺構の続きを確認するために調査を実施した。調査では、地表下30～50㎝のところで浅間Ｂ軽石の純層が検出され、断面観察によってレンズ状堆積し、Ⅲ層中から20㎝前後の礫、埴輪片が出土した。埴輪の年代は、簗瀬二子塚古墳とほぼ同時期である。市道調査で確認された遺構と同一である。埴輪片多数出土。

このトレンチの調査によって、市史で調査した６Ｂトレンチで検出された中世の道路状遺構と考えられていた溝は、遺構及び覆土の状態から７トレンチ及び市道調査で確認された遺構と同一である可能性があり、全ての遺構の配置状況をつなげると円形になることも判明した。

８トレンチ（立会地点）：７トレンチで確認された古墳周溝の続きを調査した。周溝内から、多数の葺石、埴輪、須恵器甕が出土した。土層の堆積状況から、原位置から遊離し、流れ込みによるものと判断される。埴輪の年代から推測して、簗瀬二子塚古墳とほぼ同時期あるいはそれ以降に構築された古墳と考えられる。７・８トレンチの調査によって平成３年度調査に確認した遺構が、簗瀬二子塚古墳の周溝で周堤帯に重複する古墳が存在していたことが判明した。

平成23年度調査

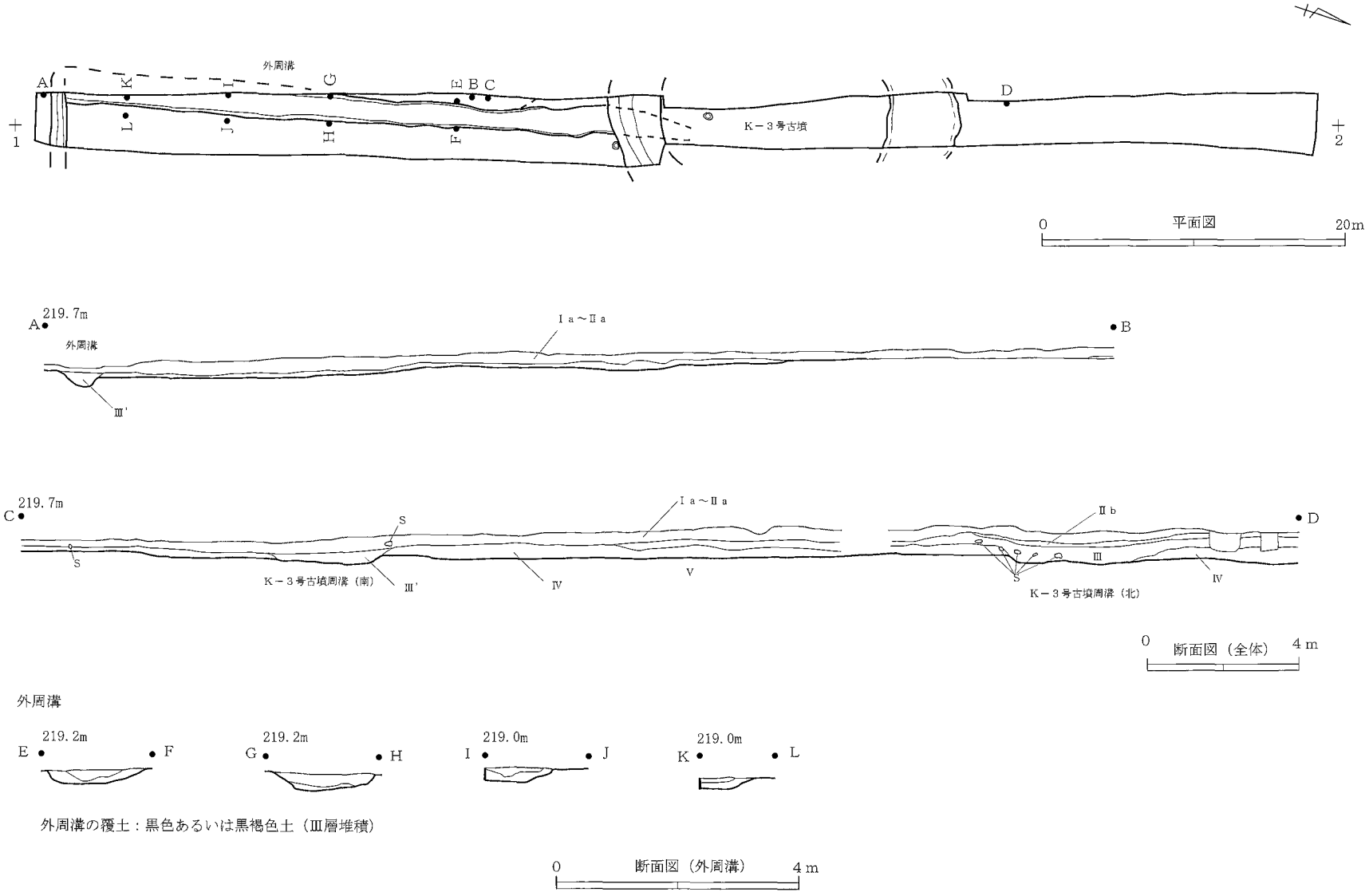
確認調査では、首塚古墳の周溝部分、八幡平陣城の堀と推定される遺構を確認した。

９・10トレンチ（個人宅造地点１・２トレンチ）：首塚古墳の北側に相当する。当初、周溝の存在が予想されたが、遺構・遺物は確認されなかった。対象地には市史５Ｂトレンチが存在する（遺構・遺物なし）。

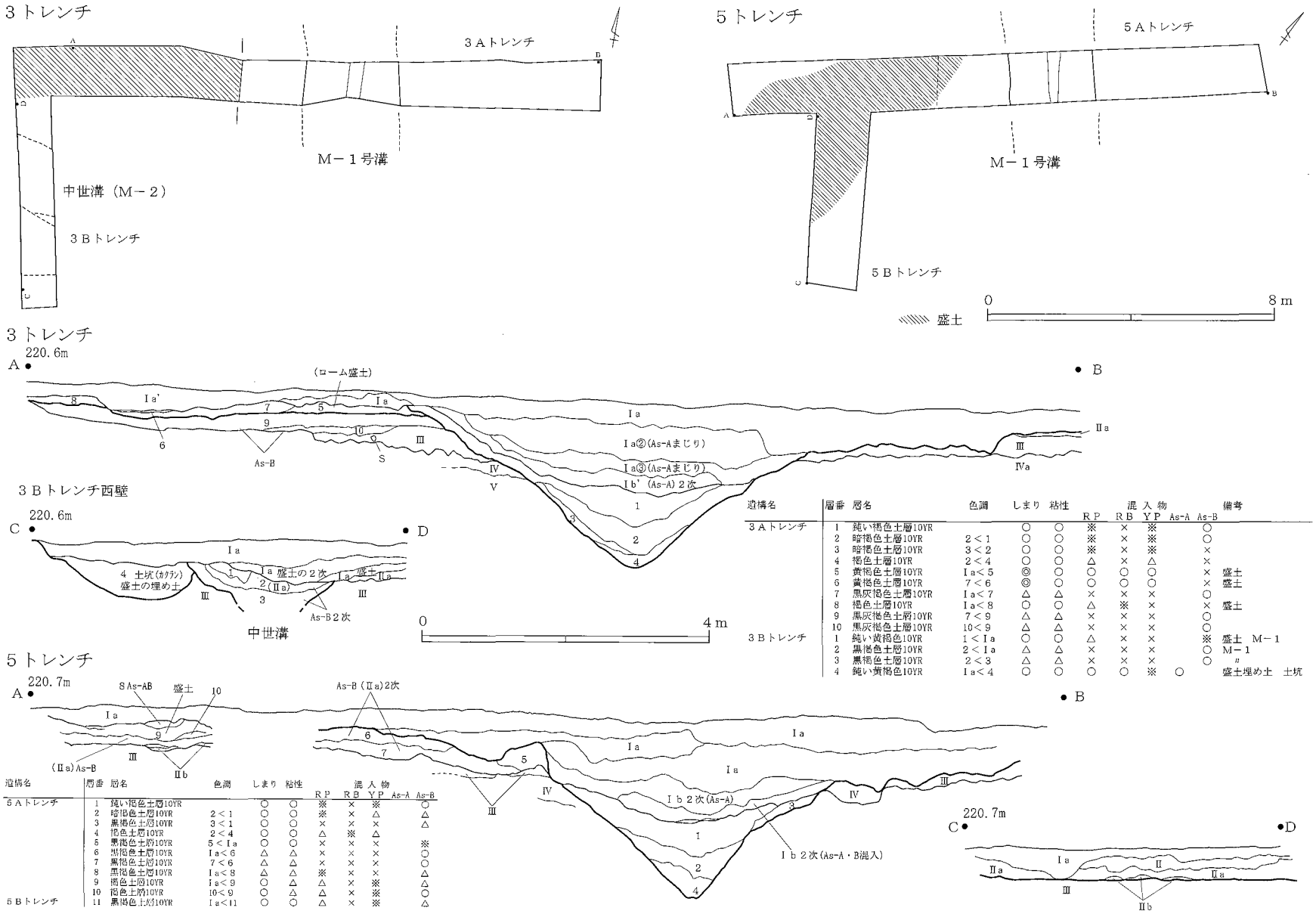
11トレンチ：八幡平陣城堀跡の推定ラインに位置する。調査では、３・５トレンチで確認された溝を検出した。溝は、Ⅱｂ層から掘り込まれ、浅間Ａ軽石及びその混入土によって埋め戻されていた。

12トレンチ：首塚古墳の周溝北側に位置する。市史編纂による学術調査でトレンチ調査を実施し、周溝が確認されているが、調査では、浅間Ｂ軽石層（Ⅱｂ層）の純層を確認し、その下部にⅢ層及びⅢ層の二次的堆積（墳丘の盛土か）を確認した。周溝と予想される部分については、トレンチ西側で周溝と推定される落ち込みが確認できたが、西側部分では、明確な周溝の範囲は確認できなかった。これにより、首塚古墳の周溝は、範囲が明確にならないほどの浅い構造であったことが明らかとなった。浅間Ｂ軽石層（Ⅱｂ層）下までの深さは、地表下30～80㎝である。

工事立会地点：平成24年１月30日に首塚古墳周溝部分を対象とした工事立会を実施した。立会では、周溝の存在を示すと思われる浅間Ｂ軽石層が帯状に確認された。今回の工事においては、遺構確認面以下の掘削は行わず、遺構の保護は可能であることから、現状保存の措置とした。



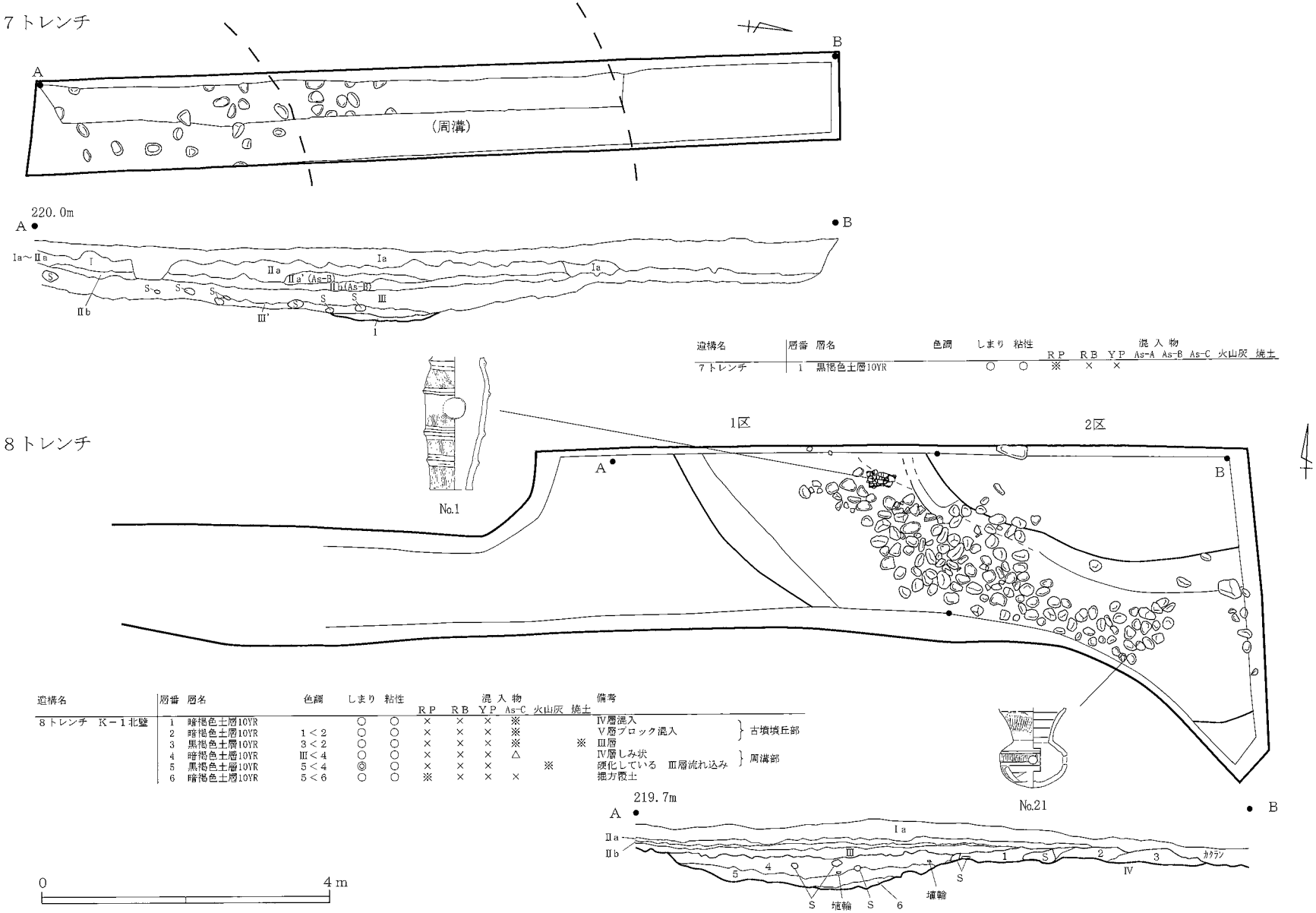
第３図　八幡平遺跡　市道部分遺構実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	As-A	As-B	備考
3Aトレンチ	1	鈍い褐色土層10YR		○	○	※	×	※		○	
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	※		○	
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	※		×	
	4	褐色土層10YR	2＜4	○	○	△	×	△		×	
	5	黄褐色土層10YR	Ia＜5	◎	○	○	○	○		×	盛土
	6	黄褐色土層10YR	7＜6	◎	○	○	○	○		×	盛土
	7	黒灰褐色土層10YR	Ia＜7	△	△	×	×	×		○	
	8	褐色土層10YR	Ia＜8	○	○	△	※	×		×	盛土
	9	黒灰褐色土層10YR	7＜9	△	△	×	×	×		○	
	10	黒灰褐色土層10YR	10＜9	△	△	×	×	×		○	
3Bトレンチ	1	鈍い黄褐色10YR	1＜Ia	○	○	△	×	×		※	盛土 M－1
	2	黒褐色土層10YR	2＜Ia	△	△	×	×	×		○	M－1
	3	黒褐色土層10YR	2＜3	△	△	×	×	×		○	〃
	4	鈍い黄褐色10YR	Ia＜4	○	○	○	○	※	○		盛土埋め土 土坑

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	As-A	As-B
5Aトレンチ	1	鈍い褐色土層10YR		○	○	※	×	※		○
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	△		△
	3	黒褐色土層10YR	3＜1	○	○	×	×	×		△
	4	褐色土層10YR	2＜4	○	○	△	※	△		
	5	黒褐色土層10YR	5＜Ia	○	○	×	×	×		※
	6	黒褐色土層10YR	Ia＜6	△	△	×	×	×		○
	7	黒褐色土層10YR	7＜6	△	△	×	×	×		○
	8	黒褐色土層10YR	Ia＜8	△	△	※	×	×		△
	9	褐色土層10YR	Ia＜9	○	△	△	×	※		△
	10	褐色土層10YR	10＜9	○	△	△	×	※		○
5Bトレンチ	11	黒褐色土層10YR	Ia＜11	○	○	△	×	※		△

第4図　八幡平遺跡　3・5トレンチ遺構実測図

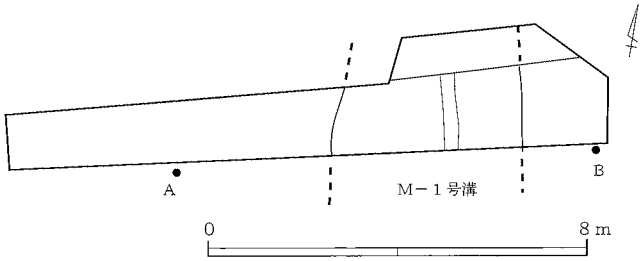


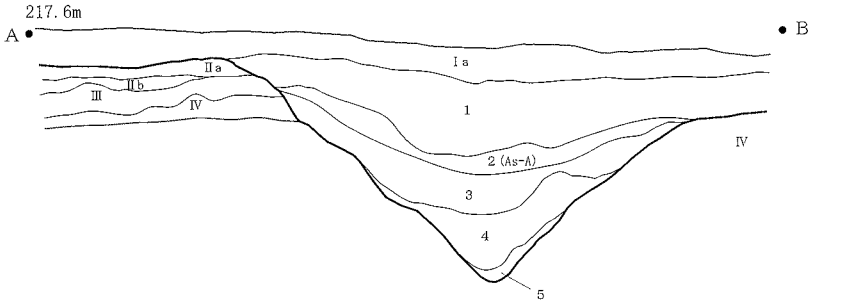
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	As-A	As-B	As-C	火山灰	焼土
7トレンチ	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	×	×					

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	As-C	火山灰	焼土	備考	
8トレンチ　K－1北壁	1	暗褐色土層10YR		○	○	×	×	×	※			IV層混入	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	×	※			V層ブロック混入	古墳墳丘部
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	○	○	×	×	×	※		※	III層	
	4	暗褐色土層10YR	III＜4	○	○	×	×	×	△			IV層しみ状	周溝部
	5	黒褐色土層10YR	5＜4	◎	○	×	×	×		※		硬化している　III層流れ込み	
	6	暗褐色土層10YR	5＜6	○	○	※	×	×	×			掘方覆土	

第５図　八幡平遺跡　７・８トレンチ遺構実測図

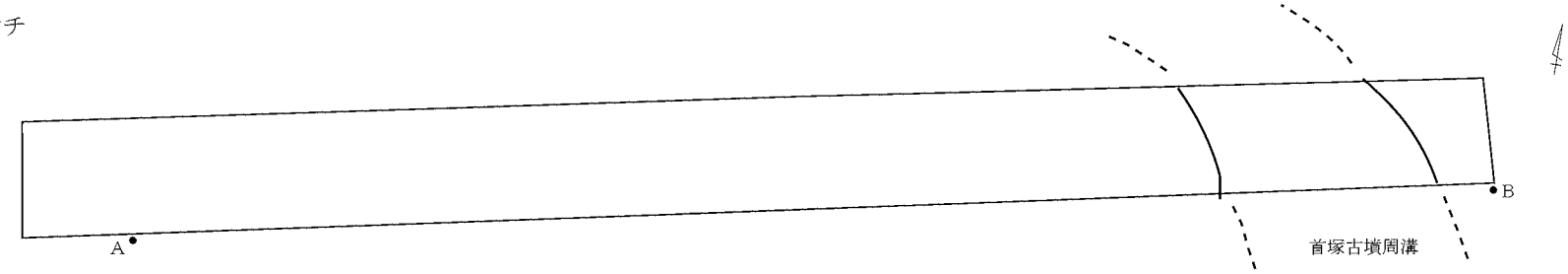
11 トレンチ

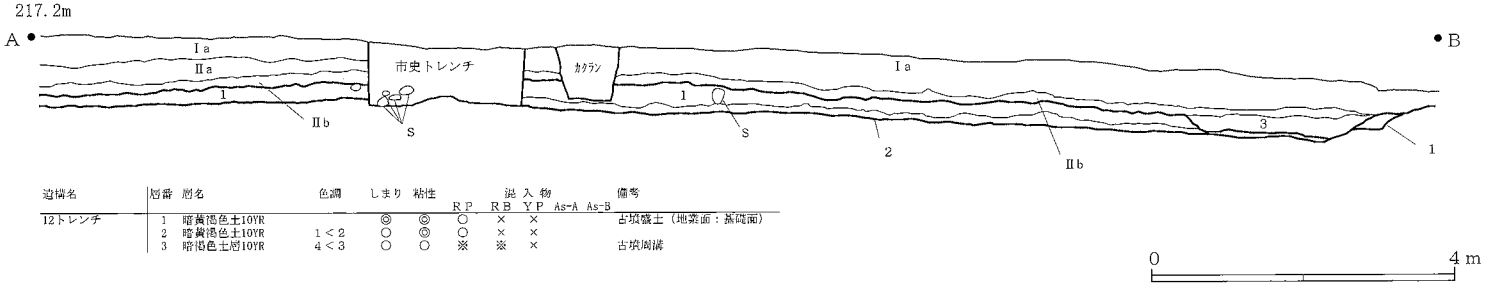




遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	As-A	As-B	備考
11トレンチ	1	黄褐色土層10YR		○	○	○	○	※	△		土層の埋め戻し
	2	灰黄褐色10YR	2＜1	×	×	×	×	×	◎		A軽石の二次堆積
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	×		※	
	4	黒褐色土層10YR	3＜4	○	○	×	×	×		※	
	5	褐色土層10YR	4＜5	○	○	※	※	※			

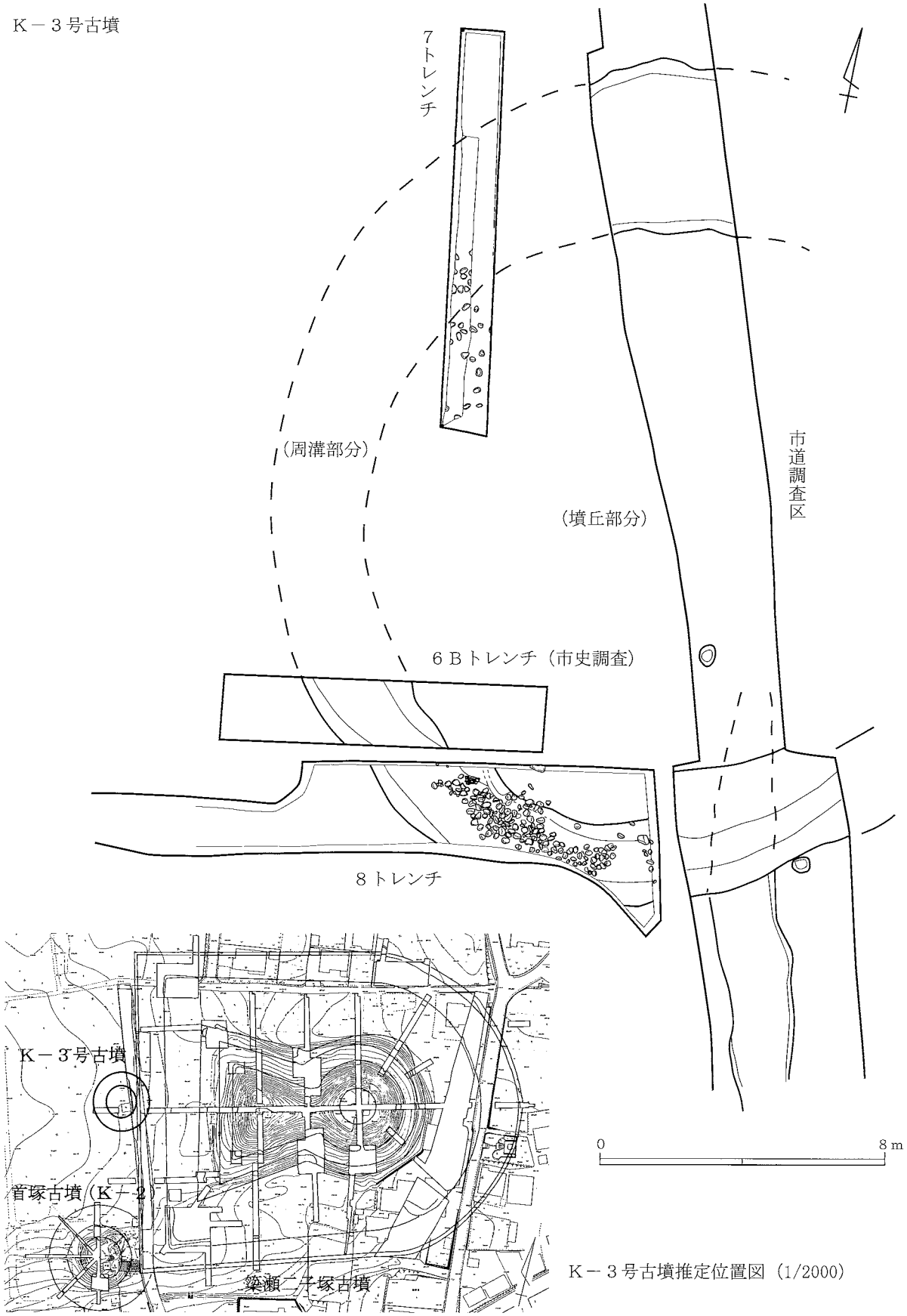
12 トレンチ



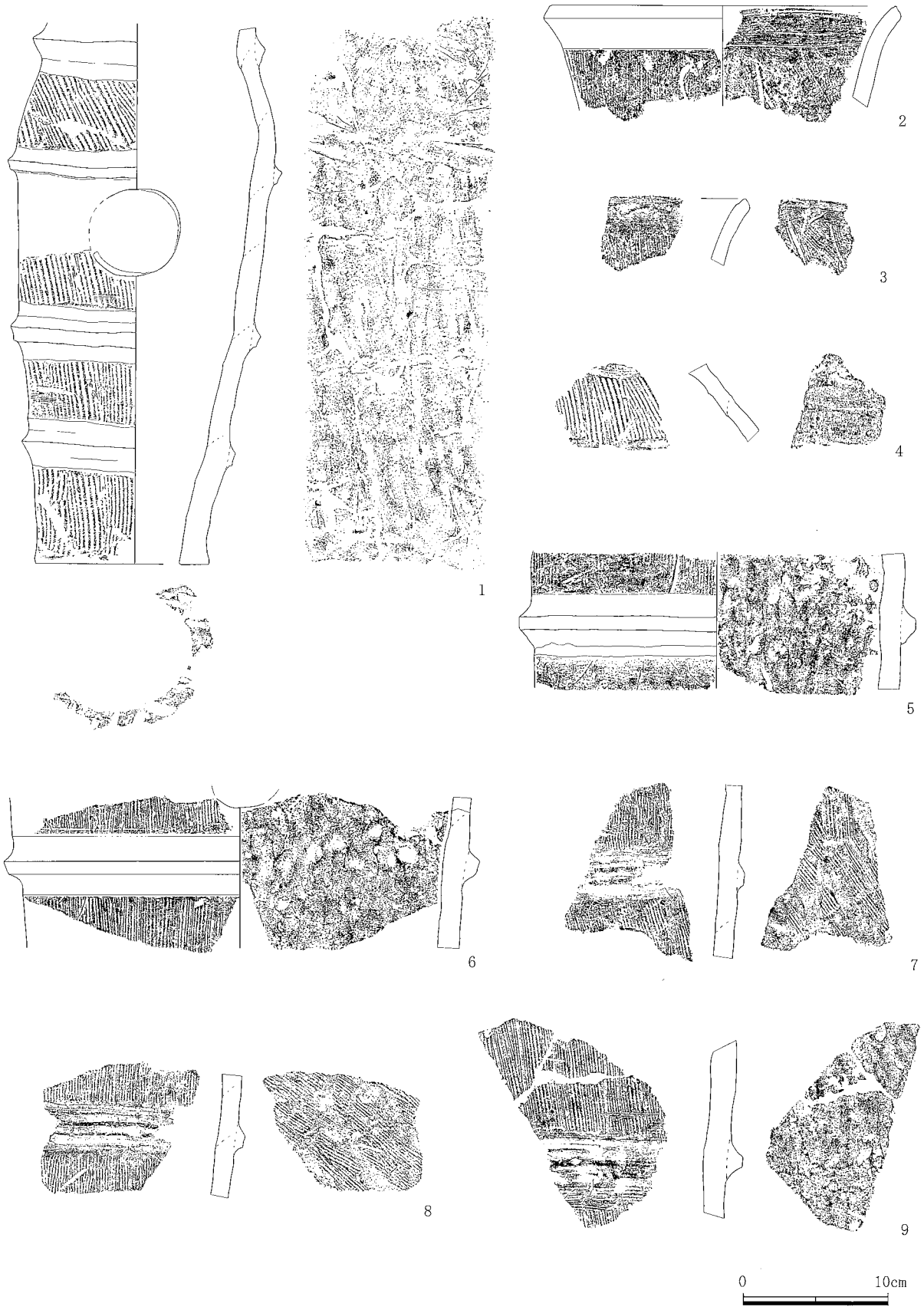


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	As-A	As-B	備考
12トレンチ	1	暗黄褐色土10YR		◎	◎	○	×	×			古墳盛土（地業面：基礎面）
	2	暗黄褐色土10YR	1＜2	○	◎	○	×	×			
	3	暗褐色土層10YR	4＜3	○	○	※	※	×			古墳周溝

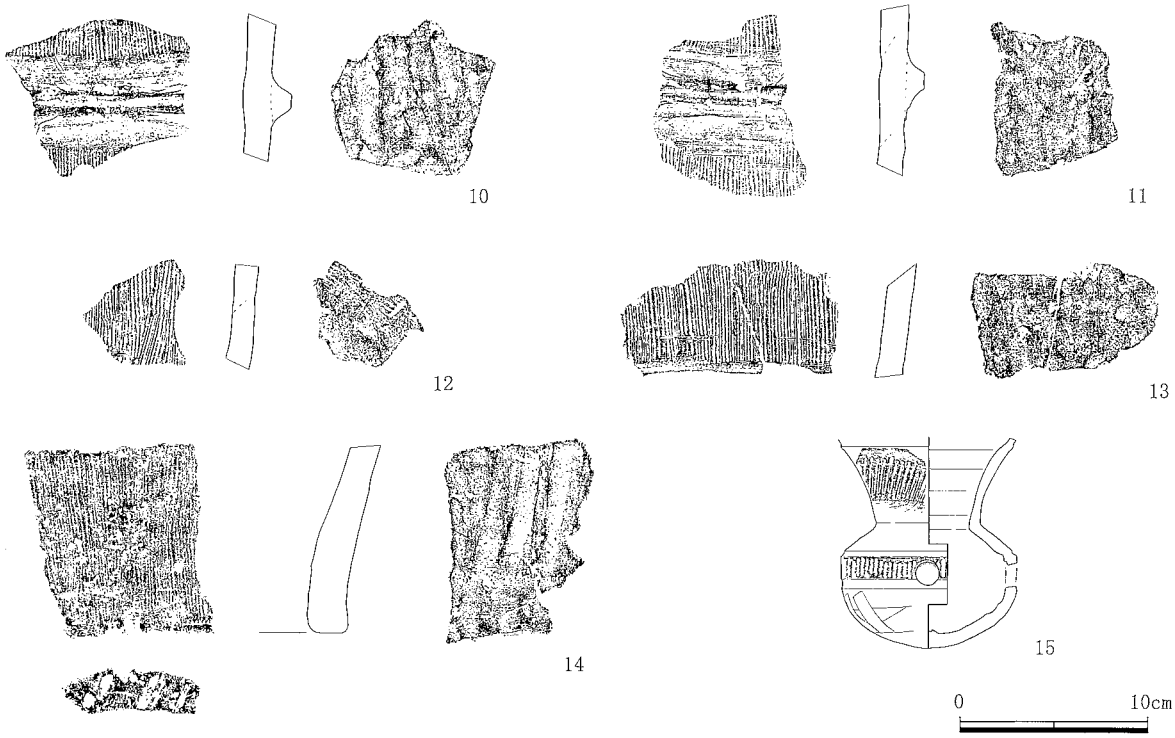
第６図　八幡平遺跡　11・12トレンチ遺構実測図



第７図　八幡平遺跡　Ｋ－３号古墳全体図



第８図　八幡平遺跡　Ｋ－３号古墳遺物実測図（１）



第９図　八幡平遺跡　Ｋ－３号古墳遺物実測図（２）

番号	出土位置	器　種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	Ｋ－３周溝 №1	朝顔形埴輪	器高(37.2) 最下段8.5 二段目8.0 三段目11.0 底径12.0 頸部径15.0 透孔6.0×6.5	①良好　②淡褐色　③チャート・海綿骨針・片岩・白色粒　④頸部より上を欠損	外面　タテハケ（6～7本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）、頸部より上部は左傾方向の指ナデ	頸部赤彩 底面篠圧痕
2	Ｋ－３周溝	円筒埴輪	口径(24.0) 器高(7.0)	①良好　②淡褐色　③砂礫・チャート・白色粒　④口縁部破片	外面　タテハケ（10～11本/2cm）後、口縁部周辺に横方向ナデ 内面　タテハケ（10～11本/2cm）後、口縁部周辺に横方向ナデ	最上段に線刻（U字形？）
3	Ｋ－３周溝 ２区	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③砂礫・白色粒　④口縁部破片	外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）	
4	Ｋ－３周溝 １区	朝顔形埴輪		①良好　②褐色　③砂礫・白色粒　④頸部破片	外面　右傾ハケ（6～7本/2cm） 内面　指ナデ"	
5	Ｋ－３周溝	円筒埴輪	外径(27.4)	①良好　②橙褐色　③チャート・片岩・海面骨針・白色粒　④体部破片	外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）	３条４段
6	Ｋ－３周溝	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③砂礫・片岩・チャート・海綿骨針　④体部破片	外面　タテハケ（10～11本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）、指圧痕多数	３段４条
7	Ｋ－３周溝 №20	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③砂礫・片岩・海綿骨針　④体部破片	外面　タテハケ（10～11本/2cm） 内面　右傾ハケ（10～11本/2cm）	
8	Ｋ－３周溝 №2	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③砂・片岩・雲母・海綿骨針　④体部破片	外面　タテハケ（10～11本/2cm） 内面　右傾ハケ後、指ナデ	
9	Ｋ－３周溝 ２区	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③片岩・海綿骨針・白色粒　④体部破片	外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）	底面篠圧痕
10	Ｋ－３周溝	円筒埴輪		①良好　②赤褐色　③チャート・片岩・海綿骨針　④体部破片	外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）	
11	Ｋ－３周溝 １区	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③角安・海綿骨針・白色粒　④体部破片	外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）	
12	Ｋ－３周溝 １区	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③砂礫・白色粒　④体部破片	外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ後、一部右傾ハケ	
13	Ｋ－３周溝 １区	円筒埴輪		①良好　②淡褐色　③片岩・海綿骨針・白色粒　④体部破片	外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）	
14	Ｋ－３周溝 ２区	円筒埴輪			外面　タテハケ（9～10本/2cm） 内面　指ナデ（下→上）	
15	Ｋ－３周溝 №21	須恵器 甕	器高11.1 口径9.4	①還元　②灰色　③海面骨針　④口縁部を欠損	外面　頸部はヘラ状工具の押圧によると思われるピッチの細かい羽状文を施す。胴部は櫛歯状工具による刺突文を施し、上下を沈線で区画する	ＭＴ15併行？

第１表　八幡平遺跡　遺物観察表

2　遺構

簗瀬二子塚古墳

市道部分で、外周溝の南西隅及び古墳の西側範囲を確認した。

簗瀬首塚古墳

古墳の北側周溝を確認した。周溝は浅く、掘り込みが明確ではないことが判明した。

Ｋ－３号古墳

市道、市史トレンチ（６Ｂトレンチ）、確認調査（７・８トレンチ）で確認された円墳である。主体部は削平されていた。周溝の径から推測される直径は約20m、拳～人頭大の葺石および遺物はすべて転落した状態で検出された。遺物は、埴輪片及び須恵器瑳が出土した。土層の堆積状況から原位置から遊離し、流れ込みによるものと判断される。須恵器の形態は、簗瀬二子塚古墳より新しいもののおよそＭＴ15型式内に収まるものと思われ、築造年代は６世紀前半と考えられる。今回の調査によって、簗瀬首塚古墳（６世紀後半)に加え本墳も簗瀬二子塚古墳に接するようにつくられていたことが分かった。

Ｍ－１号溝

３・５・11トレンチで八幡平陣城に関連する溝を地割りに沿って１条検出した。溝は、薬研堀で、内側では土居の痕跡を確認した。

中世溝

３・４・６トレンチで覆土に浅間Ｂ軽石を含む溝を１条検出した。土居を壊していることから、八幡平陣城より新しい遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

3　遺物

Ｋ－３号古墳の周溝から埴輪片、須恵器瑳が出土した。埴輪片についてはすべて円筒・朝顔形埴輪（1-15）で、形象埴輪はなかった。図示資料以外も含め、破片の大半は底径の大きい（30cm以上）固体と思われ、また突帯等の特徴から簗瀬二子塚古墳例と類似することから、流れ込みである可能性が高い。しかし、比較的残存率のよい小振りな3条4段朝顔形埴輪（1）は頸部より上に赤彩を施しており、赤彩の認められない簗瀬首塚古墳例より古相を示すと考えられ、本墳に伴うと考えられる。

周溝覆土中から出土した瑳は簗瀬二子塚古墳例と比較すると、口唇部は欠損するもののプロポーションについて大差はないように思われる。しかし、胴部の刺突文は明らかに簡素化しており、MT15型式内でもより新相を示すと考えられる。胎土には海綿骨針や細かい片岩を含み、焼成はやや軟質である。これらの特徴から藤岡産と考えられる。

Ⅳ　成果と問題点

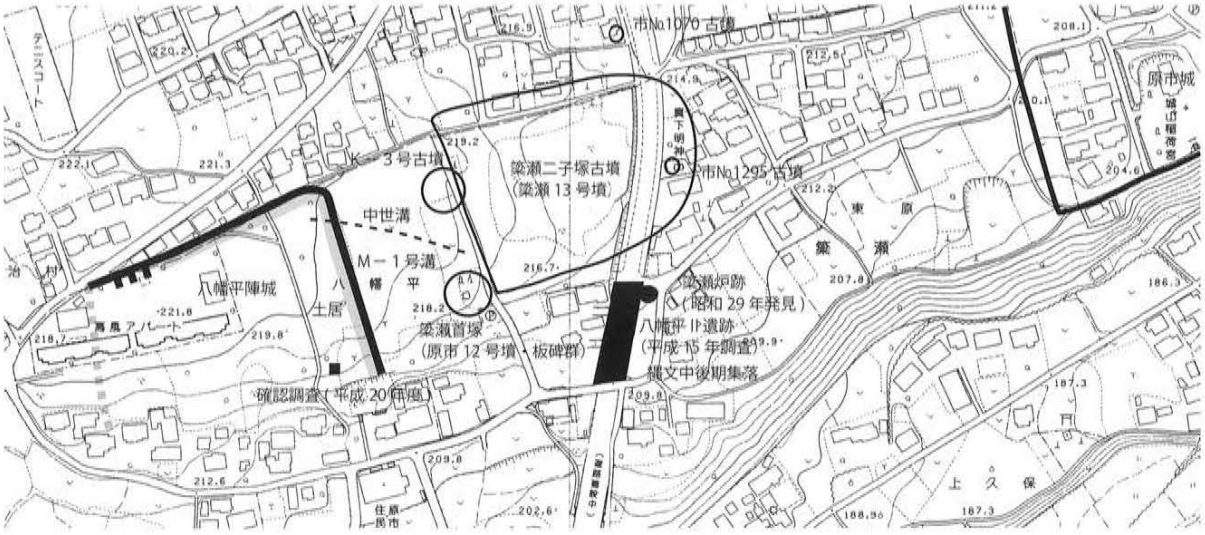
1　K－3号古墳について

今回発見されたK－3号古墳は、主体部はすでに削平され周溝のみの残存であったが、推定周溝ラインは簗瀬二子塚古墳の外周溝と重複する位置にある。調査範囲は部分的であり古墳東側の様相は分からないが、あるいは簗瀬二子塚古墳に付帯する別区であった可能性も否定できない。しかし、出土遺物が少なく、また形象埴輪も見つかっていないことからひとまず、古墳としておきたい。

出土遺物の年代観から、本墳の築造時期はおよそ6世紀前半ごろと考えられる。南に隣接する首塚古墳は6世紀後半の築造と推定されることから、より古い（簗瀬二子塚古墳に近い）時期に簗瀬二子塚古墳と重複するような位置に小円墳が作られていたことになる。資料等の制約上、本墳の詳細な性格に踏み入ることはできないが、簗瀬二子塚古墳とその周辺について考える上で興味深い事例といえる。

2　八幡平陣城について

今回の確認調査では、3・5・11トレンチでは、八幡平陣城の堀と推定される地割りに沿って延びる同一の溝と土居が初めて確認された。陣城については、山崎一氏の踏査によって縄張り図が残されている（山崎1978『群馬県古城塁址の研究』下巻）。遺構は、概ね、山崎氏の縄張り図に一致しており、今回の検証でその存在を明らかにすることができた。八幡平陣城は、永禄年間に武田氏が築いた砦と推定されている。溝の規模は、現状で上幅5.8m以上、下幅（底面）0.2mである。Ⅱａ層の掘り込みが確認でき、覆土中位まで浅間Ａ軽石（As-A）が堆積し、下位には、流れ込みによる浅間Ｂ軽石の混入土が堆積する。溝に接する西側（内側）では、ローム層の混入土で盛った土居（土塁）跡が確認された。断面形状から判断して外側の傾斜は緩く開き、内側の傾斜はやや急となる薬研堀であったと推定される。また、トレンチ及び溝内では、中世遺物は確認されなかった。今後は、中世遺構の性格を明らかにすると共に、隣接する首塚との関連性について検討していく必要がある。



第10図　八幡平遺跡と関連遺跡（Ｓ＝1/5000）

付編１　向山遺跡の確認調査

１　調査の経緯と経過

平成12年３月27日、日本移動通信株式会社（当時）より、携帯電話用中継基地局設置についての埋蔵文化財に関する照会があった。該当場所は、「磯部町３号墳」（現在は削平され所在地不明）の推定地内にあることから、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、開発に先立ち確認調査を実施することになった。平成12年４月３日付けで、確認調査の依頼があり、同年４月11日～４月14日までの間確認調査を実施した（調査担当：深町　真・井上慎也）。確認調査の結果、古墳は確認できなかったが、当地域で広く分布する古代牧に関連する区画溝の一部が検出された。しかし、確認調査の状況により、計画の変更が困難であること、遺構が部分的検出で、調査対象範囲も狭小であることから、検出された遺構の性格を把握するための必要な記録をとり、その場で記録保存の措置を講じた。

確認調査は、工事設計図の基準杭をもとに幅１ｍのトレンチを設定し、人力により遺構確認面まで表土を掘削した。その後、遺構確認面の精査では、トレンチ中央で遺構が確認され、検出状況から、区画溝の一部であることが判明し、遺構の性格を把握するための遺構精査を行い、写真撮影、平板による遺構測量、埋め戻しを行った。

２　遺跡の地理的・歴史的環境

向山遺跡は、安中市西上磯部字向山703番地１に所在する。碓氷川右岸の中位段丘（横野台地）の北側端部に立地する。標高は、259ｍである。遺跡地は、『上毛古墳綜覧』にある「磯部町３号墳」の推定地にある。本遺跡の東側には、長谷津遺跡、西側には、磯部２号墳、加賀塚遺跡がある。また、横野台地一帯には、古代牧に関連する遺構群が区画溝を中心に分布する。

３　検出された遺構と遺物

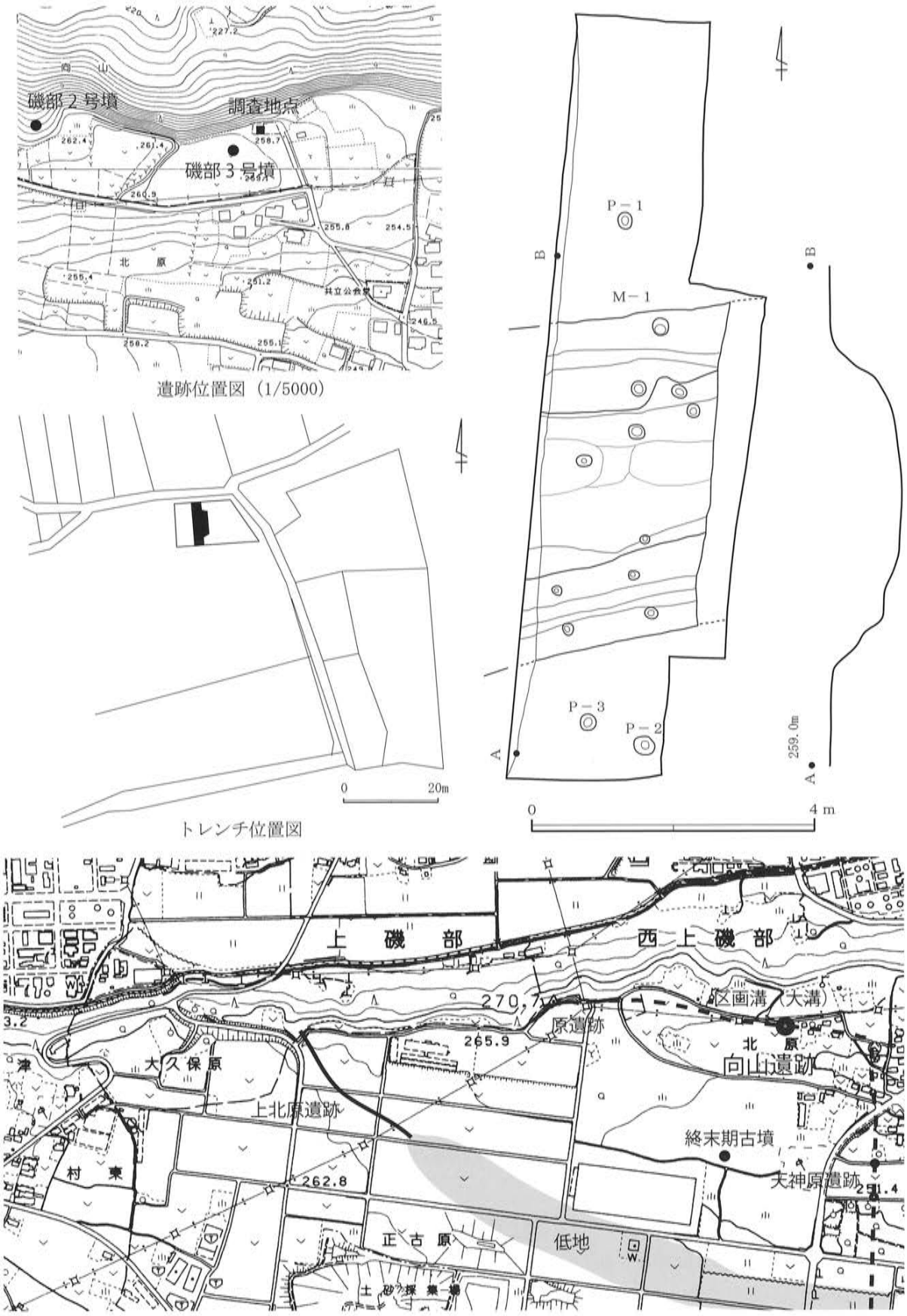
（１）遺構

古代の溝（Ｍ－１号溝）は、横野台地一帯で確認されている牧に関連する区画施設と推定される。同一規模の遺構は、天神原遺跡（平成12年度調査地点）の道路部分で確認されており、南北に延びる。覆土中位に浅間Ｂ軽石が堆積する。

当初、予想された古墳の存在は、確認できなかった。

（２）遺物

遺物は、覆土から縄文土器、礫が出土したが、遺構に関連する遺物は出土しなかった。



第11図　向山遺跡　遺構実測図

付編２　小峰遺跡の確認調査

１　調査の経緯と経過

平成20年８月22日、株式会社ＮＴＴドコモ群馬支社より、携帯電話アンテナ基地建設予定地の埋蔵文化財に関する照会があった。該当の場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地（市№351）内にあることから、その取り扱いについて協議を行い、開発に先立ち確認調査を実施することになった。同年10月21日に確認調査の依頼があり、同年10月29日に工事予定地を対象とした確認調査を実施した（調査担当：井上慎也）。確認調査の結果、古代及び中世の溝が各１条検出され、周辺には、古代の集落、中世城館が存在する可能性が判明した。しかし、確認調査の状況により、工事予定地外においても遺跡地であり、計画の変更が困難であること、遺構が部分的検出で、調査対象範囲も狭小であることから、検出された遺構の性格を把握するための必要な記録をとり、その場で記録保存の措置を講じた。

確認調査は、工事設計図の基準区をもとに９ｍ四方の工事予定地内で、幅１ｍのトレンチを設定し、ミニバックホーにより、表土を掘削し、人力による遺構確認を行った。トレンチ北側で、溝が検出されたため、調査範囲を拡張したところ、東側に１本別の溝が検出され、２本の溝が重複していることが判明した。これらの溝の性格を把握するために、その場で一部精査を行ったところ、覆土中から古代と中世の遺物が出土し、切り合い関係が認められたことから、２本の溝には時期差があることが明らかとなった。遺構精査終了後、写真撮影、土層断面図作成、平板による遺構測量、埋め戻しを行った。資料整理は、調査終了後、断続的に実施し、遺構図作成、遺物実測図作成、写真整理、報告書図版作成等を行った。

２　遺跡の地理的・歴史的環境

小峰遺跡は、安中市高別当字小峰（登記名では「小峯」）1001番地に所在する。九十九川に面した中位段丘面（原市・安中台地）の舌状に張り出した北緩斜面に立地する。市№351は、縄文・弥生・平安時代、中世の包蔵地であり、古代の瓦塔片が出土している（高別当瓦塔）。遺跡周辺の標高は171～172ｍである。

３　検出された遺構と遺物

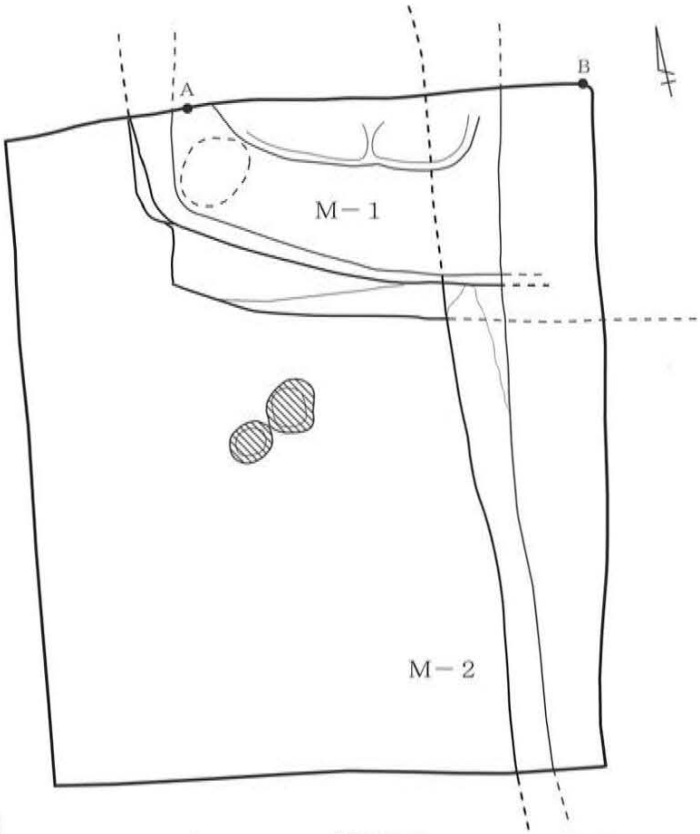
（１）遺構

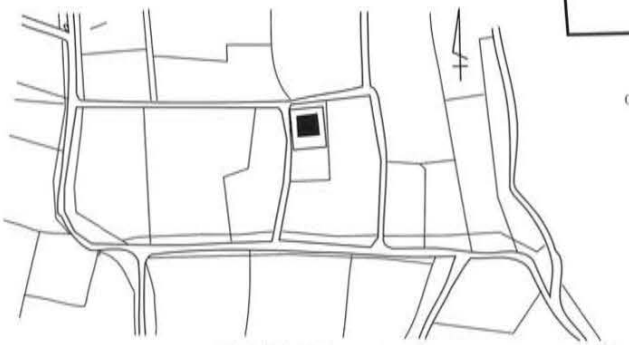
検出された遺構は、古代及び中世にそれぞれ帰属する溝２条である。Ｍ－１号溝は、ローム混じりの土で埋め戻されており、Ｍ－２号溝によって掘り返されている。部分的検出であるが、箱状と推定され、覆土から古代の土器が出土していることから、住居の可能性もある。Ｍ－２号溝は、覆土に浅間Ｂ軽石が混入し、覆土上面は浅間Ａ軽石に覆われて確認された。覆土には中世の遺物が混入し、下部では大形礫が出土した。地割りに沿って南北に延びている城館に関連する遺構と推定される。

（２）遺物

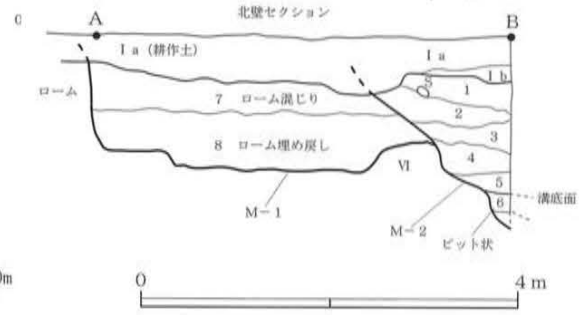
Ｍ－１号溝からは、茶碗（磁器）１点、擂り鉢（陶器）１点、古代土師器甕片少数、礫２点が出土した。Ｍ－２号溝からは、須恵器坏（底部）１点、須恵器甕１点、布目平瓦１点、擂り鉢（陶器）１点、板碑小破片３点（結晶片岩）、礫４点が出土した。

遺跡位置図（1/5000）

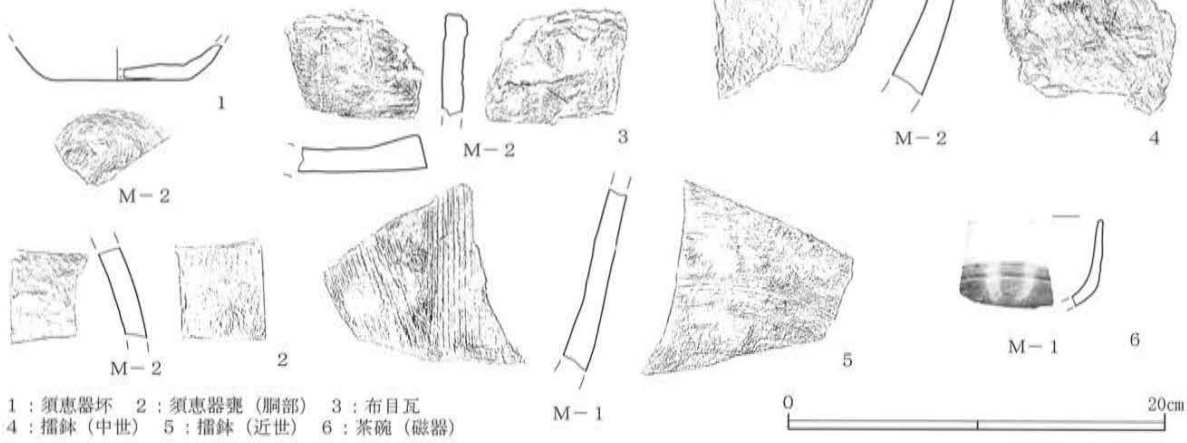




調査位置図　0　20m



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	Au-B	岩	焼土	ﾚﾝ	備考
北壁セクション	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	※	△	※	※		
	2	暗褐色土層	1＜2	○	○	※	×	※	※	×	×		
	3	褐色土層10YR	1＜3	○	○	△	※	△	×	×	×	△	
	4	褐色土層	4＜3	○	○	△	×	△	×	×	×	×	
	5	暗褐色土層	4＜5	○	○	○	×	※	×	×	×		
	6	暗褐色土層	5＜6	○	○	○	×	※	×	×	×	※	
	7	黄褐色土層											
	8	黄褐色土層											



1：須恵器坏　2：須恵器甕（胴部）　3：布目瓦
4：擂鉢（中世）　5：擂鉢（近世）　6：茶碗（磁器）

第12図　小峰遺跡　遺構・遺物実測図

付編３　安中17号墳の発掘調査

１　調査の経緯と経過

平成23年11月、開発者側より個人住宅建設工事にかかる埋蔵文化財の有無について照会があった。開発予定地は周知の遺跡である安中17号墳が存在しており、開発については当教育委員会との協議が必要であることを伝えた。その後、開発計画自体の変更及び見直しについて開発者側と協議を続けたが、見直しは困難であることから、事前に工事予定地内の遺構の状況を把握するための確認調査を実施することで開発者側と合意した。平成23年11月４日、開発者側から確認調査依頼及び必要書類（法93条届出、添付書類）が当教育委員会へ提出された。平成23年11月10日、確認調査を実施したところ、残存する墳丘下から石室側壁及び奥壁が検出され、開発者側にその旨を伝えた。平成23年11月22日、開発者側と埋蔵文化財の取り扱いについて再度協議を行った。工事計画は古墳墳丘を及び石室を全て削平するものであるが、計画変更は不可能という結論に至り、記録保存を講ずることとなった。その際、発掘調査及びその後の措置等に関する覚書を開発者側と当教育委員会の間で交わした。

平成23年11月24～30日、発掘調査を実施し、横穴式石室の羨道及び玄室、床面を確認した（調査担当：菅原龍彦）。発掘調査終了後、資料整理を断続的に実施し、平成23年度に遺構図の修正・作成、遺物水洗・注記・選別・実測・トレース・観察表作成、写真整理、報告書図版作成等を行った。

２　遺跡の地理的・歴史的環境

安中17号墳は安中市安中字藤山地内に所在する。本遺跡は九十九川と秋間川の合流点付近に位置し、両河川に挟まれた段丘上端部にある。遺跡の標高は約162mである。本墳の東約200mには、6世紀後半から７世紀代の築造と推定される円墳５基（小間古墳群）が集中する。本墳も出土遺物の年代観から6世紀後半の築造と考えられ、古墳群を構成する一つと思われる。また、本墳北西の丘陵斜面には截石切組積石室で副室構成をもつ終末期古墳である、めおと塚古墳が立地する。7・8世紀代にかけて大規模な操業を行う須恵器・瓦窯及びその生産集団との関連が想定される古墳が集中する秋間丘陵からみて、本墳はその"入口"的な立地にあるといえよう。

３　検出された遺構と遺物

調査前の現状における本墳の墳丘は径約7mを測る。周辺地面より1mほど高く、葺石もしくは石室裏込めと考えられる大小の礫が散乱していた。調査は石室部分を中心に行った。主体部は南向きに開口する横穴式両袖型石室であるが、羨道から玄室に至るまで天井石は全て消失していたため、高さは不明である。また、盗掘により羨道側壁の一部が破壊されていた。石室を構成する石材は一見、截石切組積に見えるが、壁面は面加工された自然石で積まれている。しかし、羨道と玄室の境にはL字形状に加工された石が用いられることから、一部切組積の手法が用いられているようである。石材は当地域の終末期古墳に多用される、いわゆる秋間石（安山岩質溶結凝灰岩）で、多くの石にノミ状の工具痕が認められる。石室の全長は現状で7.4mである。羨道長は3.6m、同奥幅1.2m、同前幅0.9mを測り、50～80cm幅の石材を小口・横積みの両方で積んでいる。壁面は横目地の通りを意識しているようである。入口及び奥部付近には、拳から人頭大の川原石が閉塞石として積まれていた。玄室長は3.8m、奥幅は

2.2mで入口付近の幅は1.6mを測る。羨道と異なり、幅1.2～2.2mの一枚岩で側壁を構成する。また、玄室内の床には手前と奥を分けるかのように中央部付近に板石が立てて並んでおり、中央部から奥壁側の床面には板石、手前側には小礫がそれぞれ敷かれていた。石室内は既に盗掘を受けた後であったが、奥壁寄りの床面から耳環、刀子、馬具（辻金具、鞍）、小札、鉄釘、ガラス小玉などが出土した。また、墳丘・石室覆土中からは円筒・形象埴輪片が出土し、特に羨道入口付近からは盾形埴輪片が集中して出土した。以下、出土遺物の概要を述べる。

①耳環…2点出土している。鉄地金銅張で、2点とも径2.7cm、断面は5.5mmの円形を呈し、ほぼ同形であることから一対のものと考えられる。重量は耳環1が8.8g、耳環2は11.5gを測る。

②刀子…銹化が激しく刃部、茎部とも端部を欠損する。残存長9.7cm。

③馬具…辻金具は平面方形を呈し4鋲を打つ。銹化が激しく欠損部位も多いが、およそ3.2cm四方を測る。鉄地金銅張。鞍と思われる破片の残存長は6.7cm、環状部分はおよそ3×4cmで断面は6mmである。

④小札…小札は数点出土しているが、比較的残存状態の良い2点を図化した。小札1は残存長7cm、幅2.5cmで縅孔・綴孔などの有無は確認できない。小札2は残存長2.5cm、幅2.5cmを測り、4孔があけられる。

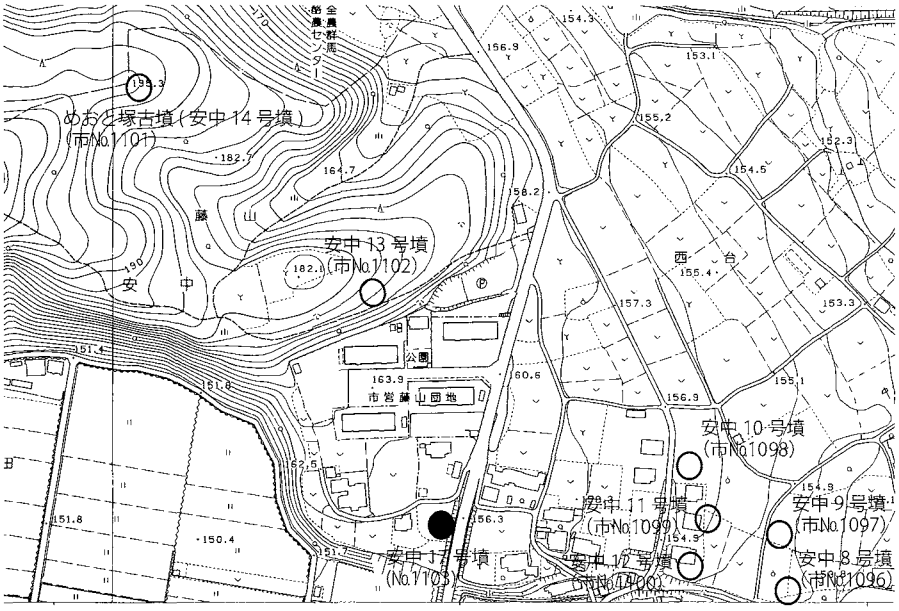
⑤ガラス小玉…稜が鈍い十二面体で、色調は青紫色を呈す。長さ1.3cm、最大幅0.7cm。孔径は0.15cm（両端部のみ0.3cm）で気泡を多く含む。

⑥円筒埴輪…墳丘及び石室内覆土中から破片が出土したが、小片で図示できるものはなかった。色調は淡褐色～赤褐色を呈し、胎土には結晶片岩や海綿骨針、チャートなどを多量に含むことから藤岡産埴輪と考えられる。外面はタテハケを施し、内面上部は斜ハケ、下部には指ナデを行う。底部調整は見当たらず、透孔形状は円形である。形態から2条3段構成と考えられる。

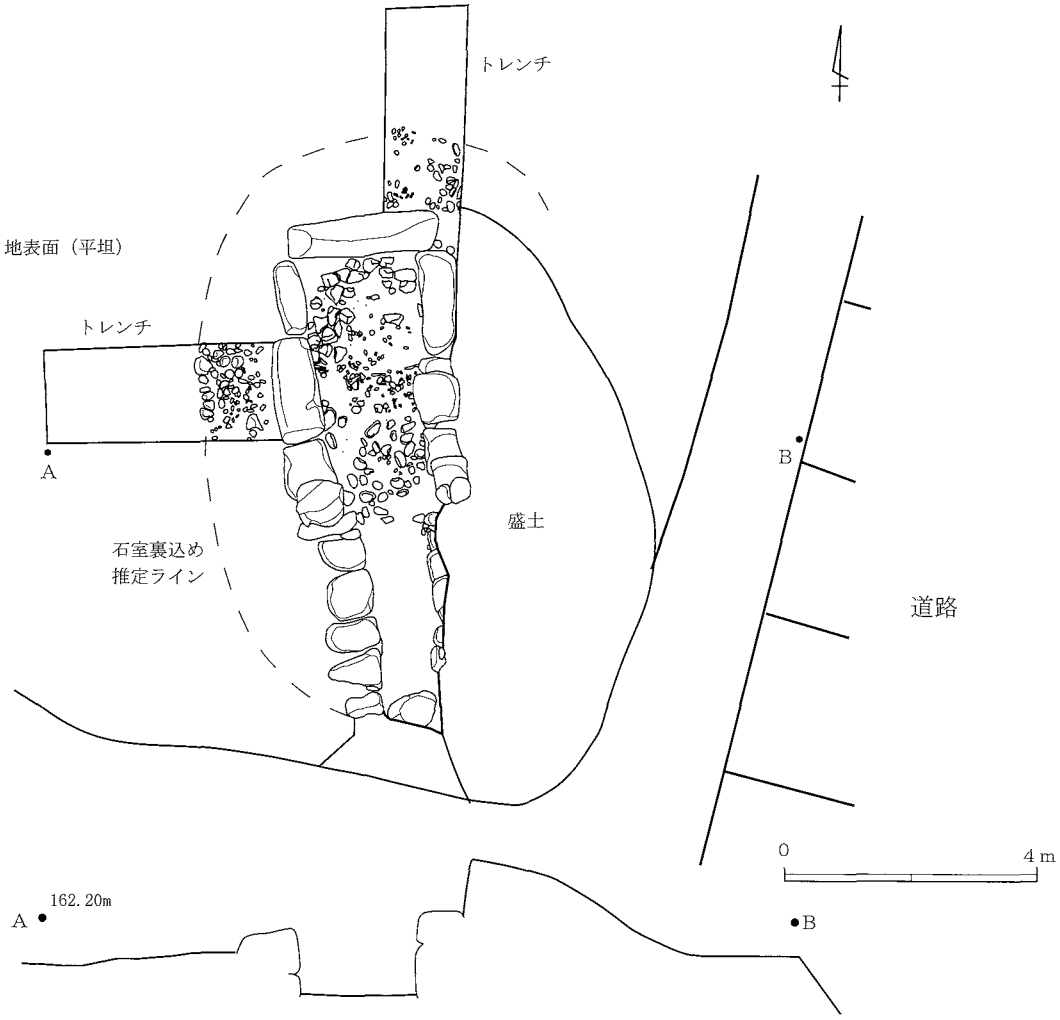
⑦形象埴輪…墳丘および石室内覆土中から家形（入母屋造）、翳形、大刀形埴輪が出土した。また、石室入口付近で盾形埴輪が出土し、これは前庭部に立てられていた可能性がある。色調・胎土は円筒埴輪と同様、藤岡産と考えられる。このうち盾形埴輪は破片部位の検討から、複数個体存在したと考えられる。盾形埴輪の残存高は約72cm。上辺と底部付近を欠損する以外ほぼ復元できた。全体の形状から、上部は山形の長方形を呈し背部は円筒部につながっているものと推測される。両翼部は粘土板で成型し、円筒部に差し込んでいる。また、稜の緩やかな鋸歯文を描き文様の沈線を縁取るように赤彩を施す。

4　成果と問題点

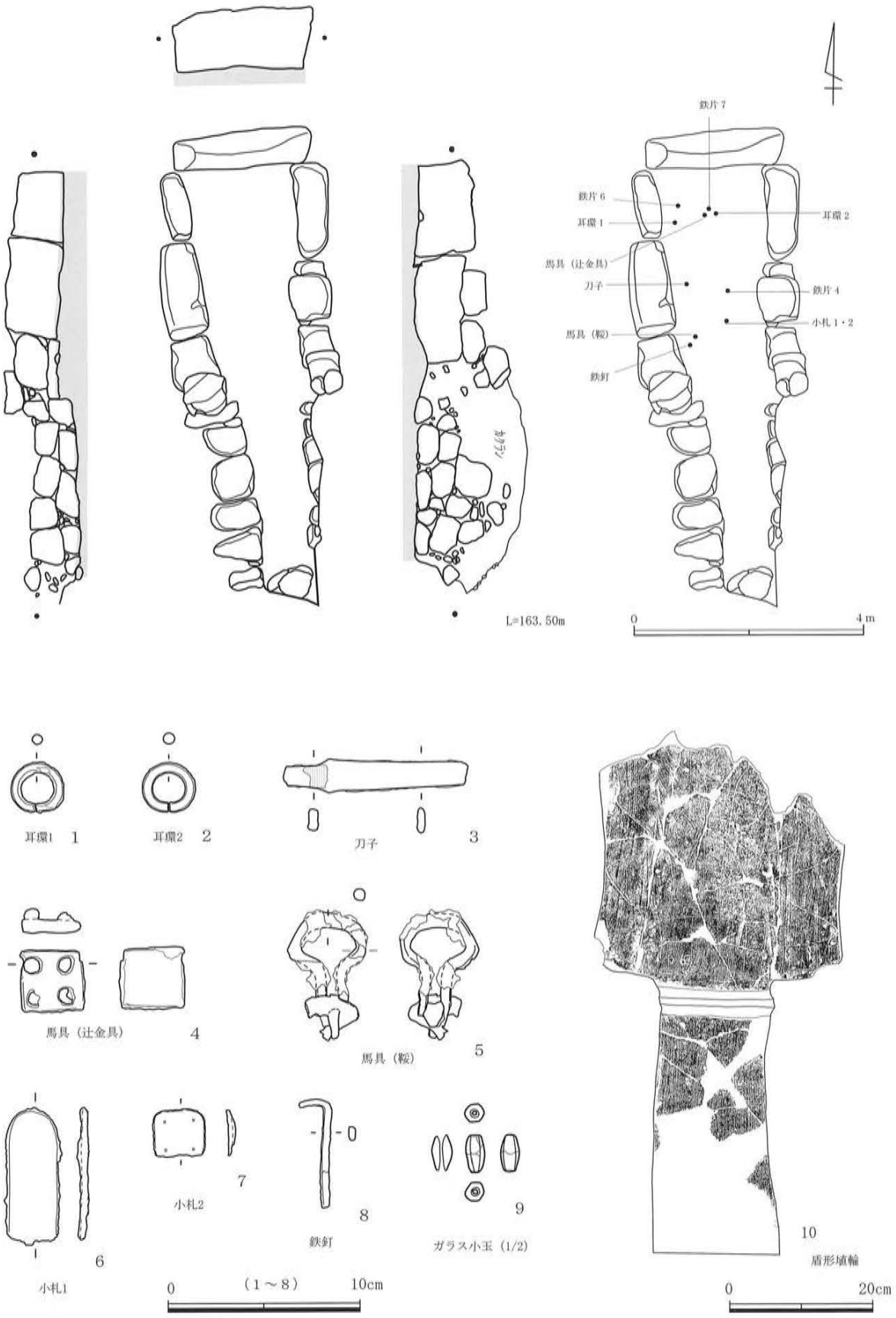
本墳の築造時期は、出土埴輪の特徴からおよそ6世紀後半ごろと考えられる。石室の大きさから推定すると、墳丘は20m近い規模を有していたと思われる。埴輪の種類の多さは当地域の同規模円墳の中でも際立っており、また、副葬品に馬具や武具を有する点も特筆される。これらの特徴に加え、石室も自然石乱石積でなく一部切組積と考えられることから、本墳の被葬者は小間古墳群中でも中核をなしていた人物であったと考えられる。当地域における6世紀後半の古墳の調査事例は少なく、一部とはいえ切組積を用いる本墳の存在は小間古墳群中、ひいては終末期の秋間地域における古墳築造の盛行を考える上で重要である。



安中17号墳の位置と周辺古墳（1/5000）



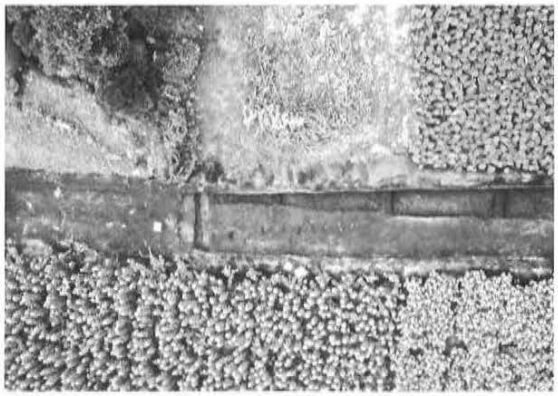
第13図　安中17号墳　全体図



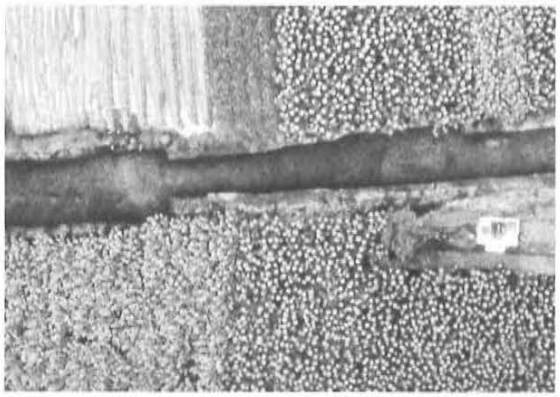
第14図　安中17号墳　石室実測図・遺物実測図

図版 1

八幡平遺跡（C－7） 全景（右：簗瀬二子塚古墳、下：首塚）



簗瀬二子塚古墳　外周溝



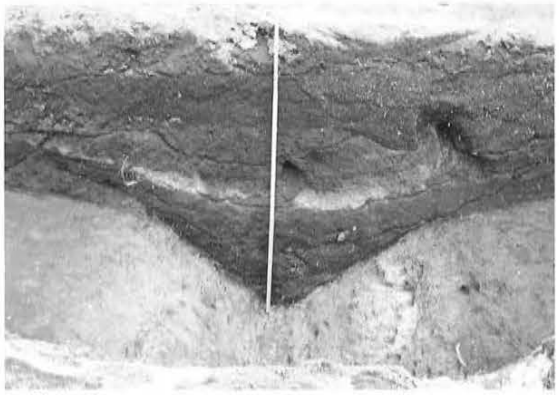
K－3号古墳

外周溝とK－3号古墳周溝南側

K－3号古墳周溝北側と土層断面

２トレンチ

３トレンチ　Ｍ－１号溝

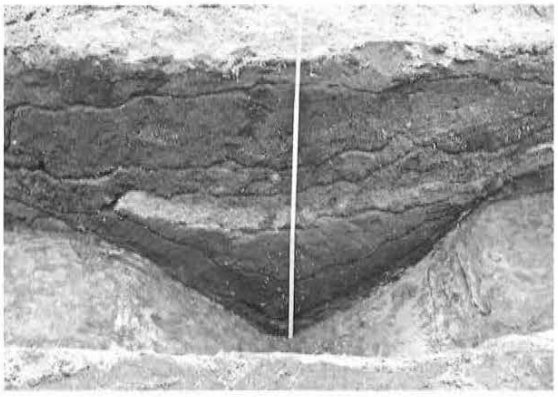


３トレンチ　Ｍ－１号溝土層断面

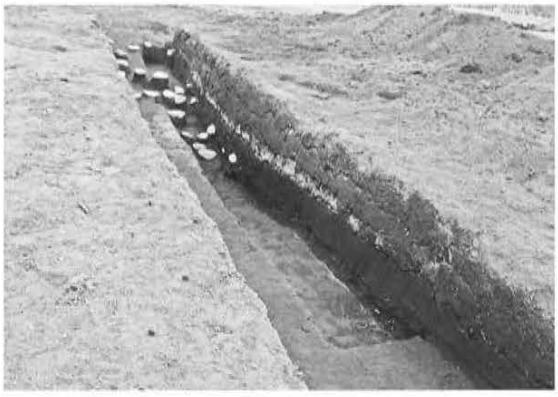
４トレンチ

５トレンチ　Ｍ－１号溝

５トレンチ　Ｍ－１号溝　土居痕跡



５トレンチ　Ｍ－１号溝　土層断面

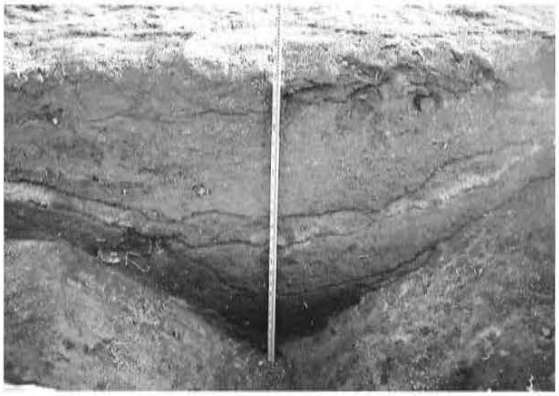


７トレンチ　古墳周溝

図版３

８トレンチ　Ｋ－３号古墳周溝

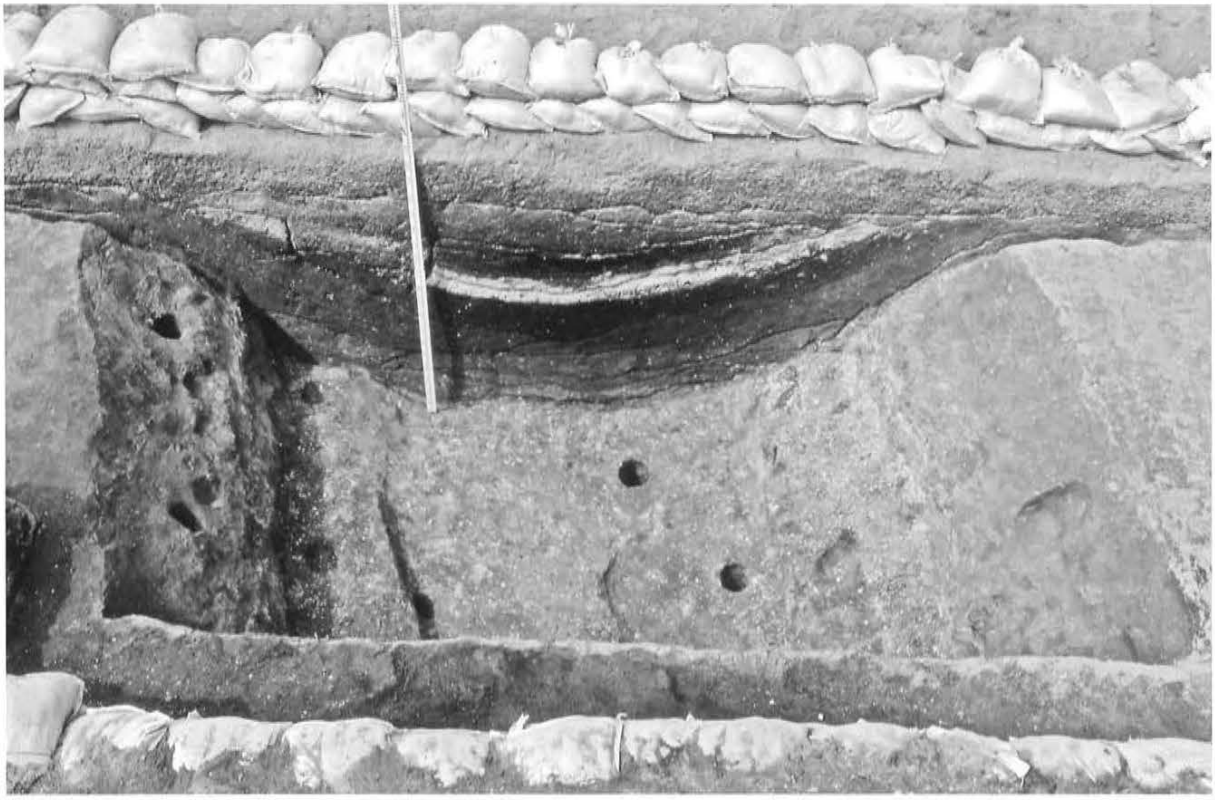
11トレンチ　Ｍ－１号溝



11トレンチ　Ｍ－１号溝土層断面

11トレンチ　Ｍ－１号溝掘り込み

12トレンチ　首塚古墳周溝



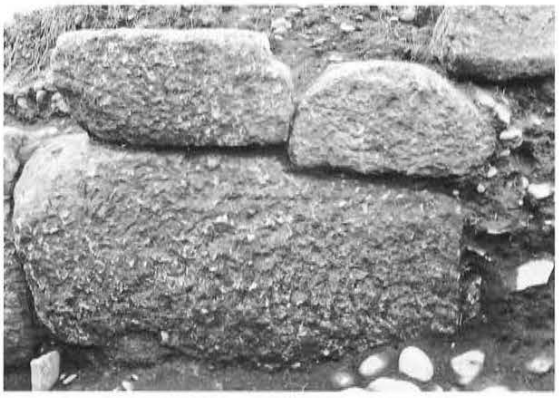
向山遺跡　M－1号溝

小峰遺跡　全景

図版 5

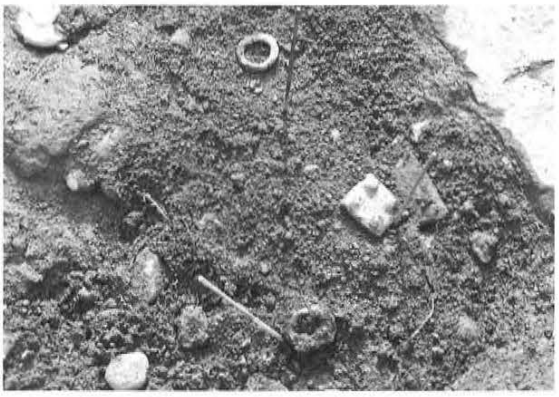
安中17号墳　全景（西より）

安中17号墳　石室（南より）



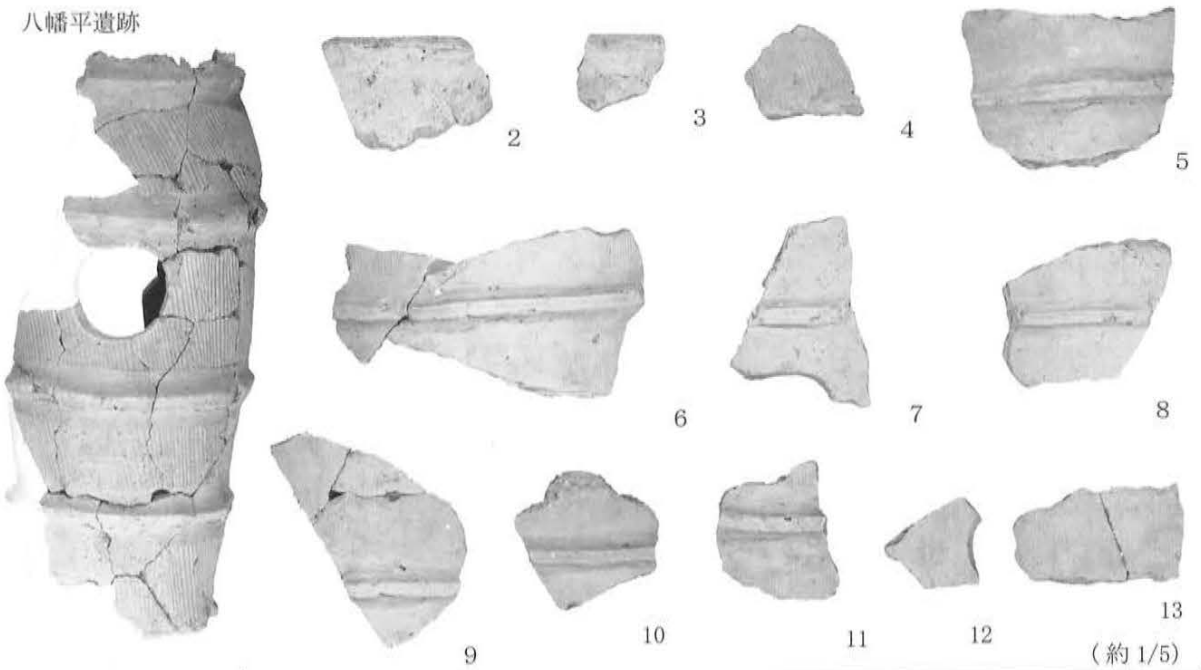
安中17号墳　石室側壁（ノミ痕）

安中17号墳　玄室入口（石材加工状況）

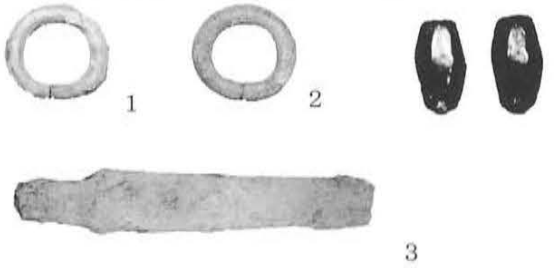


安中17号墳　玄室遺物出土状況

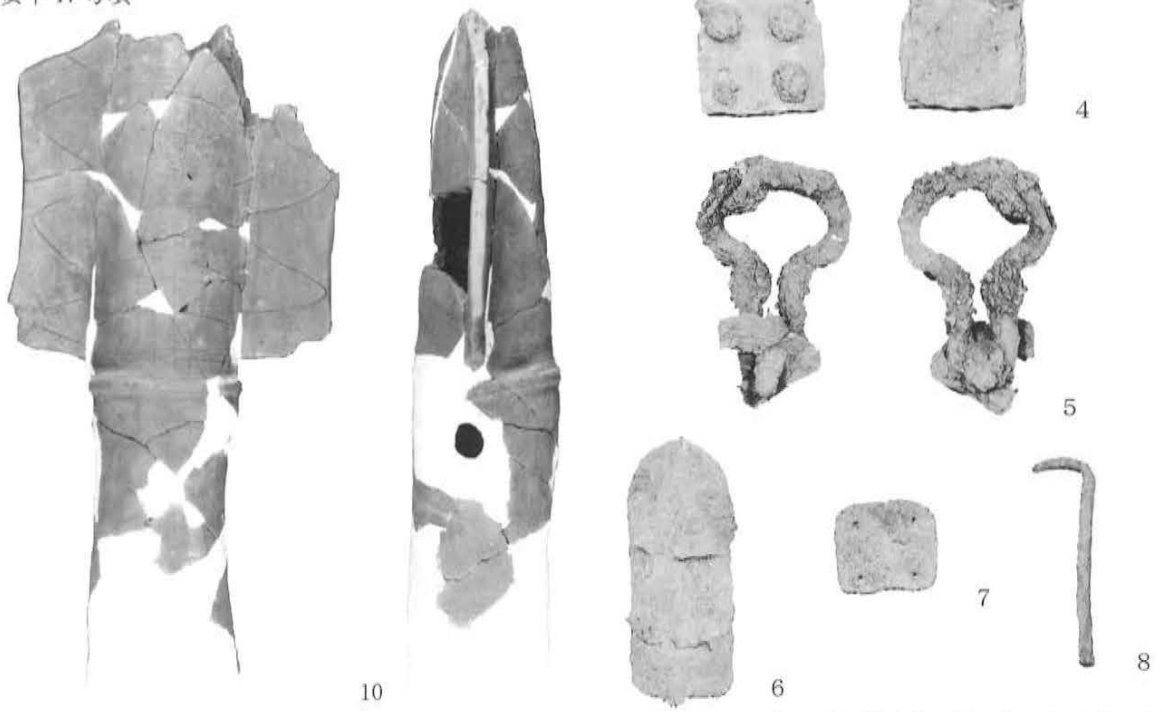
八幡平遺跡



（約 1/5）



安中 17 号墳



（1 ～ 8：約 1/2、9：1/1、10：約 1/8）

発掘調査報告書　抄録

ふりがな	しないいせき　いち　はちまんたいらいせき・むかいやまいせき・こみねいせき・あんなかじゅうななごうふん
書名	市内遺跡１　八幡平遺跡・向山遺跡・小峰遺跡・安中17号墳
副書名	
巻次	1
シリーズ番号	
編著者名	井上慎也・菅原龍彦
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379－0292　群馬県安中市松井田町新堀245　　TEL 027－382－1111
発行年	西暦2012年（平成24年）３月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
八幡平遺跡（はちまんたいら）	安中市簗瀬字八幡平（あんなかしやなせ　はちまんたいら）769番地他	102113	C-7	36°18′38″	138°51′29″	１次19910910～19911009	340㎡	市道建設
			C-24			２次20100510～20100514	170㎡	宅地造成
向山遺跡（むかいやま）	安中市西上磯部字向山（あんなかしにしかみいそべ　むかいやま）703番地１		F-6	36°17′37″	138°51′6″	20000411～20000414	30㎡	携帯基地局建設
小峰遺跡（こみね）	安中市高別当字小峰（あんなかしこうべつとう　こみね）1001番地		D-25	36°19′54″	138°57′1″	20081029	40㎡	携帯基地局建設
安中17号墳（あんなかじゅうななごうふん）	安中市安中字藤山地（あんなかしあんなか　ふじやま）内		D-27	36°20′5″	138°53′19″	20111124～20111130	25㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡平遺跡	古墳・城館	縄文中期・古墳	古墳周溝、堀・溝	縄文土器（前・中期）、埴輪（円筒）、須恵器（𤭯）中世陶器	簗瀬二子塚古墳に接する円墳、中世八幡平陣城の外堀を確認
向山遺跡	生産	奈良・平安	溝	縄文土器 須恵器・土師器、陶磁器（茶碗、擂り鉢等）	牧関連の区画溝
小峰遺跡	集落・城館	奈良・平安・中～近世	溝	埴輪（盾形・円筒）、鉄製品、耳環、ガラス玉	中世城館の可能性
安中17号墳	古墳	古墳後期	古墳		横穴式石室

要約

八幡平遺跡の調査地点は、簗瀬二子塚古墳の西側と八幡平陣城の中間に位置する。簗瀬二子塚古墳外周溝と重複する円墳を確認。周溝内から埴輪片、須恵器𤭯が出土。古墳の築造年代は、簗瀬二子塚古墳と首塚古墳との間の時期と推定される。首塚古墳の周溝は、浅く不明瞭であることが判明した。中世の八幡平陣城の堀と推定される遺構と内側で土居跡を確認。首塚に関連する遺構は確認されなかった。

向山遺跡では、牧に関連する区画溝の一部を確認。小峰遺跡では、中世溝を確認し、城館の存在を推定。安中17号墳では、横穴式石室の円墳と推定され、石室内から埴輪（盾等の形象・円筒）、鉄製品、耳環、ガラス玉が出土。６世紀後半の古墳。

市内遺跡１

－八幡平遺跡・向山遺跡・小峰遺跡・安中17号墳－

発行日　平成24年３月26日

編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市松井田町新堀245

印刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67